

硝子戸の中

夏目漱石

青空文庫

硝子戸ガラスどの中から外を見渡すと、霜除しもよけをした芭蕉ばしやうだの、赤い実みの結なった梅もどきの枝だの、無遠慮に直立した電信柱だのがすぐ眼に着くが、その他にこれと云って数え立てるほどのものはほとんど視線に入こって来ない。書斎にいる私の眼界は極きわめて単調でそうしてまた極めて狭いのである。

その上私は去年の暮から風邪かぜを引いてほとんど表へ出ずに、毎日この硝子戸の中なかにばかり坐すわっているので、世間の様子はちつとも分らない。心持が悪いから読書もあまりしない。私はただ坐つたり寝たりしてその日その日を送っているだけである。

しかし私の頭は時々動く。気分も多少は変る。いくら狭い世界の中なかでも狭いなりに事件が起つて来る。それから小さい私と広い世の中とを隔離しているこの硝子戸の中へ、時々人が入いつて来る。それがまた私にとっては思いがけない人で、私の思いがけない事を云つたり為したりする。私は興味きみに充みちた眼をもつてそれらの人を迎えたり送つたりした事さえある。

私はそんなものを少し書きつづけて見ようかと思う。私はそうした種類の文字もんじが、忙しい人の眼に、どれほどつまらなく映るだろうかと懸念けねんしている。私は電車の中でポケットから新聞を出して、大きな活字だけに眼を注そそいでいる購読者の前に、私の書くような閑散な文字を列ならべて紙面をうずめて見せるのを恥はずかしいものの一つに考える。これらの人々は火事や、泥棒や、人殺しや、すべてその日その日の出来事のうちで、自分が重大と思う事件か、もしくは自分の神経を相当に刺戟しげきし得る辛辣しんらつな記事のほかには、新聞を手取る必要を認めていないくらい、時間に余裕をもたないのだから。——彼らは停留所で電車を待ち合わせる間に、新聞を買って、電車に乗っている間に、昨日きのう起つた社会の変化を知って、そうして役所か会社へ行き着くと同時に、ポケットに収めた新聞紙の事はまるで忘れてしまわなければならないほど忙いそがしいのだから。

私は今これほど切りつめられた時間しか自由にできない人達の軽蔑けいべつを冒おかして書くのである。

去年から歐洲では大きな戦争が始まっている。そうしてその戦争がいつ済むとも見当けんとうがつかない模様である。日本でもその戦争の一小部分を引き受けた。それが済むと今度は議会在解散きたになった。来るべき総選挙は政治界の人々にとっての大切な問題になっている。

米が安くなり過ぎた結果農家に金が入らないので、どこでも不景気だと零こぼしている。年中行事で云えば、春の相撲すもうが近くに始まろうとしている。要するに世の中は大変多事である。硝子戸の中にじつと坐っている私などはちよつと新聞に顔が出せないような気がする。私
が書けば政治家や軍人や実業家や相撲すもう狂を押し退おけて書く事になる。私だけではとても
それほどの胆力が出て来ない。ただ春に何か書いて見ろと云われたから、自分以外にあま
り関係のないつまらぬ事を書くのである。それがいつまでつづくかは、私の筆の都合つごうと、
紙面の編へん輯しゅうの都合とできまるのだから、判然はつきりした見当は今つきかねる。

一一

電話口へ呼び出されたから受話器を耳へあてがって用事を訊きいて見ると、ある雑誌社の
男が、私の写真を貰もらいたいのだが、いつ撮とりに行つて好いか都合を知らしてくれろとい
うのである。私は「写真は少し困ります」と答えた。

私はこの雑誌とまるで関係をもっていないなかつた。それでも過去三四年の間にその一二冊
を手にした記憶はあつた。人の笑っている顔ばかりをたくさん載のせるのがその特色だと思

ったほかに、今は何にも頭に残っていない。けれどもそこにわざとらしく笑っている顔の多くが私に与えた不快の印象はいまだに消えずにいた。それで私は断わろうとしたのである。

雑誌の男は、卯年の正月号だから卯年の人の顔を並べたいのだという希望を述べた。私は先方のいう通り卯年の生れに相違なかった。それで私はこう云った。――

「あなたの雑誌へ出すために撮る写真は笑わなくつてはいけないのでしよう」

「いえそんな事はありません」と相手はすぐ答えた。あたかも私が今までその雑誌の特色を誤解していたごとくに。

「当り前の顔で構いませんなら載せていただいても宜しゅうございます」

「いえそれで結構でございますから、どうぞ」

私は相手と期日の約束をした上、電話を切った。

なかいちにち
中一日 おいて打ち合せをした時間に、電話をかけた男が、綺麗な洋服を着て写真機を携えて私の書齋に這入って来た。私はしばらくその人と彼の従事している雑誌について話をした。それから写真を二枚撮って貰った。一枚は机の前に坐っている平生の姿、一枚は寒い庭前の霜の上に立っている普通の態度であった。書齋は光線がよく透らないので、

機械を据えつけてからマグネシアを燃した。その火の燃えるすぐ前に、彼は顔を半分ばかり私の方へ出して、「御約束ではございますが、少しどうか笑っていただけますまいか」と云った。私はその時突然微かな滑稽を感じた。しかし同時に馬鹿な事をいう男だという気もした。私は「これで好いでしよう」と云ったなり先方の注文には取り合わなかつた。彼が私を庭の木立の前に立たして、レンズを私の方へ向けた時もまた前と同じような鄭重な調子で、「御約束ではございますが、少しどうか……」と同じ言葉を繰り返した。私は前よりもなお笑う気になれなかつた。

それから四日ばかり経つと、彼は郵便で私の写真を届けてくれた。しかしその写真はまさしく彼の注文通りに笑っていたのである。その時私は中が外れた人のように、しばらく自分の顔を見つめていた。私にはそれがどうしても手を入れて笑っているように拵えたものとしか見えなかつたからである。

私は念のため家へ来る四五人のものにその写真を出して見せた。彼らはみんな私と同様に、どうも作つて笑わせたものらしいという鑑定を下した。

私は生れてから今日までに、人の前で笑いたくもないのに笑つて見せた経験が何度となくある。その偽りが今この写真師のために復讐を受けたのかも知れない。

彼は気味のよくない苦笑を洩らしている私の写真を送ってくれたけれども、その写真を載せると云った雑誌はついに届けなかった。

三

私がHさんからヘクトーを貰った時の事を考えると、もういつの間にか三四年の昔になつてゐる。何だか夢のような心持もする。

その時彼はまだ乳離れのしたばかりの小供であつた。Hさんの御弟子は彼を風呂敷に包んで電車に載せて宅まで連れて来てくれた。私はその夜彼を裏の物置の隅に寝かした。寒くないように藁を敷いて、できるだけ居心地の好い寢床を拵えてやったあと、私は物置の戸を締めた。すると彼は宵の口から泣き出した。夜中には物置の戸を爪で掻き破つて外へ出ようとした。彼は暗い所にたつた独り寝るのが淋しかったのだらう、翌朝までまんじりともしない様子であつた。

この不安は次の晩もつづいた。その次の晩もつづいた。私は一週間余りかかつて、彼が与えられた藁の上によろやく安らかに眠るようになるまで、彼の事が夜になると必ず気に

かかった。

私の小供は彼を珍らしがって、間まがな隙すきがな玩弄物おもちゃにした。けれども名がないのでついに彼を呼ぶ事ができなかつた。ところが生きたものを相手にする彼らには、是非とも先方の名を呼んで遊ぶ必要があつた。それで彼らは私に向つて犬に名を命つけてくれとせがみ出した。私はとうとうヘクトーという偉い名を、この小供達の朋友ほうゆうに与えた。

それはイリアッドに出てくるトロイ一の勇将の名前であつた。トロイと希臘ギリシヤと戦争をした時、ヘクトーはついにアキリスのために打たれた。アキリスはヘクトーに殺された自分の友達の讐かたきを取つたのである。アキリスが怒いかつて希臘方がたから躍おどり出した時に、城の中に逃げ込まなかつたものはヘクトー一人であつた。ヘクトーは三たびトロイの城壁をめぐつてアキリスの鋒ほこざき先を避けた。アキリスも三たびトロイの城壁をめぐつてその後を追いかけた。そうしてしまいとうとうヘクトーを槍やりで突き殺した。それから彼の死骸しがいを自分のチャリオットしばに縛りつけてまたトロイの城壁を三度引き摺ずり廻した。……

私はこの偉大な名を、風呂敷包にして持つて来た小さい犬に与えたのである。何にも知らないはずの宅うちの小供も、始めは変な名だなあと云つていた。しかしじきに慣れた。犬もヘクトーと呼ばれるたびに、嬉うれしそうに尾を振つた。しまいにはさすがの名もジョンとか

ジョージとかいう平凡なヤソキようしんじや 耶蘇教信者の名前と一様に、毫もごう 古典的クラシカルな響を私に与えなくなつた。同時に彼はしだいに宅のものから元もとほど珍重されないようになった。

ヘクトーは多くの犬がたいていみまい 羅かかるジステンパーという病気のために一時入院した事がある。その時は子供がよく見舞みまいに行つた。私も見舞に行つた。私の行つた時、彼はさも嬉しそうに尾を振つて、懐なつかしい眼を私の上に向けた。私はしやがんで私の顔を彼の傍そばへ持つて行つて、右の手で彼の頭を撫なでてやつた。彼はその返礼に私の顔を所ところ嫌きらわず舐なめようとしてやまなかつた。その時彼は私の見ている前で、始めて医者すずの勧める小量の牛乳を呑のんだ。それまで首を傾かしげていた医者も、この分ならあるいは癒なるかも知れないと云つた。ヘクトーははたして癒つた。そうして宅うちへ歸つて来て、元氣に飛び廻つた。

四

日ならずして、彼は二三の友達こうちゆうを拵こしらへた。その中で最も親しかつたのはすぐ前の医者いしやくの宅たくにいる彼と同年輩どうねんぱいぐらいの悪戯いたずら者ものであつた。これは基キリス督トキ教キョウ徒トに相ふ応さうしいジョンと
いう名前なまえを持つていたが、その性質せいしやうは異端いたん者しやのヘクトーよりも遙はるかに劣せうつていたようであ

る。むやみに人に噛みつく癖があるので、しまいにはとうとう打ち殺されてしまった。

彼はこの悪友を自分の庭に引き入れて勝手な狼藉を働らいて私を困らせた。彼らはしきりに樹の根を掘って用もないのに大きな穴を開けて喜んだ。綺麗な草花の上にわざと寝転んで、花も茎も容赦なく散らしたり、倒したりした。

ジョンが殺されてから、無聊な彼は夜遊び昼遊びを覚えるようになった。散歩などにかけるとき、私はよく交番の傍に日向ぼっこをしている彼を見る事があつた。それでも宅にさえいれば、よくうさん臭いものに吠えついて見せた。そのうちで最も猛烈に彼の攻撃を受けたのは、本所辺から来る十歳ばかりになる角兵衛獅子の子であつた。この子はいつでも「今日は御祝い」と云つて入つて来る。そうして家の者から、麵麩の皮と一銭銅貨を貰わないうちは帰らない事に一人できめていた。だからヘクトーがいくら吠えても逃げ出さなかつた。かえつてヘクトーの方が、吠えながら尻尾を股の間に挟んで物置の方へ退却するのが例になつていた。要するにヘクトーは弱虫であつた。そうして操行からいうと、ほとんど野良犬と扱ふところのないほどに墮落していた。それでも彼らに共通な人懐っこい愛情はいつまでも失わずにいた。時々顔を見合せると、彼は必ず尾を掉つて私に飛びついて来た。あるいは彼の背を遠慮なく私の身体に擦りつけた。私は彼の泥足のために、

衣服や外套がいとうを汚よごした事が何度あるか分らない。

去年の夏から秋へかけて病氣やまいをした私は、一カ月ばかりの間あいだついにヘクトーに会う機会を得ずに過ぎた。病やまいがようやく愈おこたつて、床とこの外へ出られるようになってから、私は始めて茶の間の縁えんに立つて彼の姿を宵闇よいやみの裡うちに認めた。私はすぐ彼の名を呼んだ。しかし生いけが垣きの根にじつとうずくまっている彼は、いくら呼んでも少しも私の情けなさに応じなかった。彼は首も動かさず、尾も振らず、ただ白い塊かたまりのまま垣根にこびりついてるだけであった。私は一カ月ばかり会わないうちに、彼がもう主人の声を忘れてしまったものと思つて、微かすかな哀あい愁しゆうを感じずにはいられなかった。

まだ秋の始めなので、どこの間の雨戸も締められずに、星の光が明け放たれた家の中からよく見られる晩であった。私の立つていた茶の間の縁には、家うちのものが二三人いた。けれども私がヘクトーの名前を呼んでも彼らはふり向きもしなかった。私がヘクトーに忘れられたごとくに、彼らもまたヘクトーの事をまるで念頭に置いていないように思われた。

私は黙つて座敷へ歸つて、そこに敷いてある布団ふとんの上に横になつた。病後の私は季節に不相当な黒八丈くろはちじょうの襟えりのかかつた銘仙めいせんのどてらを着ていた。私はそれを脱ぐのが面倒だから、そのまま仰向あおむけに寝て、手を胸の上で組み合せたなり黙つて天てん井じょうを見つめて

いた。

五

翌朝書齋の縁に立つて、初秋の庭の面を見渡した時、私は偶然また彼の白い姿を苔の上に認めた。私は昨夕の失望を繰り返すのが厭さに、わざと彼の名を呼ばなかった。けれども立ったなりじつと彼の様子を見守らずにはいられなかった。彼は立木の根方に据えつけた石の手水鉢の中に首を突き込んで、そこに溜っている雨水をびちやびちや飲んでいた。

この手水鉢はいつ誰が持つて来たとも知れず、裏庭の隅に転がっていたのを、引越した当時植木屋に命じて今の位置に移させた六角形のもので、その頃は苔が一面に生えて、側面に刻みつけた文字も全く読めないようになっていた。しかし私には移す前一度判然とそれを読んだ記憶があった。そうしてその記憶が文字として頭に残らないで、変な感情としていまだに胸の中を往來していた。そこには寺と仏と無常の匂が漂っていた。

ヘクトーは元氣なさそうに尻尾を垂れて、私の方へ背中を向けていた。手水鉢を離れた

時、私は彼の口から流れる垂涎よだれを見た。

「どうかしてやらないといけない。病気だから」と云つて、私は看護婦を顧かえりみた。私はその時まだ看護婦を使つていたのである。

私は次の日も木賊とくさの中に寝ている彼を一目見た。そうして同じ言葉を見護婦に繰り返した。しかしヘクトーはそれ以来姿を隠したぎり再び宅うちへ歸つて来なかつた。

「医者へ連れて行こうと思つて、探したけれどもどこにもおりません」

家うちのものはこう云つて私の顔を見た。私は黙つていた。しかし腹の中では彼を貰い受けた当時の事さえ思い起された。届とどけしよ書を出す時、種類という下へ混血児あいのこと書いたり、色という字の下へ赤あか斑まだらと書いた滑稽こっけいも微かすかに胸に浮んだ。

彼がいなくなつて約一週間も経たつたと思う頃、一二丁隔へだたつたある人の家から下女が使に来た。その人の庭にある池の中に犬の死骸しがいが浮いているから引き上げて頸輪くびわを改ためて見ると、私の家の名前が彫ほりつけてあつたので、知らせに来たというのである。下女は「こちらで埋うめておきましようか」と尋ねた。私はすぐ車くるま夫まやをやつて彼を引き取らせた。

私は下女をわざわざ寄こしてくれた宅うちがどこにあるか知らなかつた。ただ私の小供の時分から覚えてゐる古い寺の傍そばだろうとばかり考えていた。それは山鹿素行やまがそこうの墓のある寺で、

山門の手前に、旧幕時代の記念のように、古い榎えのきが一本立っているのが、私の書齋えのきの北の縁あまたから数多の屋根を越してよく見えた。

車夫は筵むしろの中にヘクトーの死骸を包くるんで帰つて来た。私はわざとそれに近づかなかつた。白木しらぎの小さい墓標を買つて来さして、それへ「秋風の聞えぬ土に埋うめてやりぬ」という一こ句を書いた。私はそれを家うちのものに渡して、ヘクトーの眠くっている土の上に建てさせた。彼の墓は猫の墓から東ひがし北きたに当つて、ほぼ一間ばかり離れているが、私の書齋のぞの、寒い日の照らない北側の縁ガラストに出て、硝子戸のぞのうちから、霜しもに荒された裏庭のぞを覗くと、二つともよく見える。もう薄黒く朽くちかけた猫のに比べると、ヘクトーのはまだ生なま々なましく光っている。しかし間もなく二つとも同じ色に古びて、同じく人の眼につかなくなるだろう。

六

私はその女に前後四五回会つた。

始めて訪たずねられた時私は留守るすであつた。取次とつぎのものが紹介状しやうじやうを持って来るように注意したら、彼女は別にそんなものを貰もらう所がないといつて帰つて行つたそうである。

それから一日ほど経って、女は手紙で直接に私の都合を聞き合せに来た。その手紙の封筒から、私は女がつい眼と鼻の間に住んでいる事を知った。私はすぐ返事を書いて面会日を指定してやった。

女は約束の時間を違えず来た。三つ柏の紋のついた派出な色の縮緬の羽織を着ているのが、一番先に私の眼に映った。女は私の書いたものをたいてい読んでいるらしかった。それで話は多くそちらの方面へばかり延びて行った。しかし自分の著作について初見の人から賛辞ばかり受けているのは、ありがたいようではなはだこそばゆいものである。実をいうと私は辟易した。

一週間おいて女は再び来た。そうして私の作物をまた賞めてくれた。けれども私の心はむしろそういう話題を避けたがついていた。三度目に来た時、女は何かに感激したものと見えて、袂から手帛を出して、しきりに涙を拭った。そうして私に自分のこれまで経過して来た悲しい歴史を書いてくれないかと頼んだ。しかしその話を聴かない私には何という返事も与えられなかった。私は女に向って、よし書くにしたところで迷惑を感じる人が出て来はしないかと訊いて見た。女は存外判然した口調で、実名さえ出さなければ構わないと答えた。それで私はとにかく彼女の経歴を聴くために、とくに時間を拵えた。

するとその日になって、女は私に会いたいという別の女の人を連れて来て、例の話はこの次に延ばして貰いたいと云った。私には固より彼女の違約を責める気はなかった。二人を相手に世間話をして別れた。

彼女が最後に私の書齋に坐つたのはその次の日の晩であった。彼女は自分の前に置かれた桐の手焙の灰を、真鍮の火箸で突ツつきながら、悲しい身の上話を始める前、黙っている私にこう云った。

「この間は昂奮して私の事を書いていただきたくように申し上げましたが、それは止めに致します。ただ先生に聞いていただくだけにしておきますから、どうかそのおつもりで……」

私はそれに対してこう答えた。

「あなたの許諾を得ない以上は、たといどんなに書きたい事柄が出て来てもけっして書く気遣はありませんから御安心なさい」

私が充分な保証を女に与えたので、女はそれではと云って、彼女の七八年前からの経歴を話し始めた。私は黙然として女の顔を見守っていた。しかし女は多く眼を伏せて火鉢の中ばかり眺めていた。そうして綺麗な指で、真鍮の火箸を握っては、灰の中へ突き刺し

た。

時々腑ふに落ちないところが出てくると、私は女に向つて短かい質問をかけた。女は単たんか簡かんにまた私の納得なっとくでできるように答をした。しかししたいは自分一人で口を利きいていたので、私はむしろ木像のようにじつとしていただけであつた。

やがて女の頬は熱ほてつて赤くなつた。白粉おしろいをつけていないせいか、その熱つた頬の色が著るしく私の眼に着いた。俯うつむき向むになつていたので、たくさんある黒い髪かみの毛も自然私の注意ちゆいを惹ひく種かたになつた。

七

女の告白は聴きいている私を息苦しくしたくらいに悲痛きわを極きめたものであつた。彼女は私に向つてこんな質問をかけた。――

「もし先生が小説を御書きになる場合には、その女の始末をどうなさいますか」
私は返答に窮きつした。

「女の死ぬ方がいいと御思いになりますか、それとも生きてるように御書きになりますか」

か」

私はどちらにでも書けると答えて、暗あんに女の気色けしきをうかがった。女はもつと判然あした挨拶あいさつを私から要求するように見えた。私は仕方なしにこう答えた。――

「生きるという事を人間の中心点として考えれば、そのままにしている差さしつかえ支かえないでしょう。しかし美しいものや気高けだかいものを一義いっぎにおいて人間を評価すれば、問題が違って来るかも知れません」

「先生はどちらを御扱おえらびになりますか」

私はまた躊躇ちゆうちよした。黙もくつて女のいう事を聞いているよりほかに仕方がなかった。

「私は今持つているこの美しい心持が、時間というもののためだけにだんだん薄うすれて行くのが怖こわくつてたまらないのです。この記憶が消えてしまつて、ただ漫然と魂ぬけがらの抜ぬ殻がらのように生きている未来を想像すると、それが苦痛で苦痛で恐ろしくつてたまらないのです」

私は女が今広い世間せかいの中にたつた一人立つて、一寸いっすんも身動きのできない位置にいる事を知っていた。そうしてそれが私の力でどうする訳にも行かないほどに、せつぱつまった境遇である事も知っていた。私は手のつけようのない人の苦痛を傍観する位置に立たせられてじつとしていた。

私は服薬の時間を計るため、客の前も憚はばからず常に袂たもと時計を座蒲団ざぶとんの傍わきに置く癖くせをもつていた。

「もう十一時だから御帰りなさい」と私はしまいに女に云った。女は厭いやな顔もせず立ち上った。私はまた「夜が更ふけたから送つて行つて上げましょう」と云つて、女と共に沓くつぬに下りた。

その時美くしい月が静かな夜をよ残る隈くまなく照らしていた。往来へ出ると、ひっそりした土の上にひびく下駄げたの音はまるで聞こえなかつた。私は懐ふところ手てをしたまま帽子も被かぶらずに、女のあと後につついて行つた。曲り角の所で女はちよつと会え釈しゃくして、「先生に送つていだいてはもつたいのうございます」と云つた。「もつたいない訳がありません。同じ人間です」と私は答えた。

次の曲り角へ来たとき女は「先生に送つていただくのは光栄でございます」とまた云つた。私は「本当に光栄と思ひますか」と真面目まじめに尋ねた。女は簡単に「思ひます」とはつきり答えた。私は「そんなら死なずに生きていらつしやい」と云つた。私は女がこの言葉をどう解釈したか知らない。私はそれから一丁ばかり行つて、また宅うちの方へ引き返したのである。

むせつぽいような苦しい話を聞かされた私は、その夜かえって人間らしい好い心持を久しぶりに経験した。そうしてそれが尊たつとい文芸上の作さく物ぶつを読んだあとの気分と同じものだという事に気がついた。有楽座や帝劇へ行つて得意になつていた自分の過去の影法師が何となく浅ましく感ぜられた。

八

不愉快に充みちた人生をとぼとぼたどりつつある私は、自分のいつか一度到着しなければならぬ死という境地について常に考えている。そうしてその死というものを生よりは楽なものだとばかり信じている。ある時はそれを人間として達し得る最上至高の状態だと思ふ事もある。

「死は生よりも尊たつとい」

こういう言葉が近頃では絶えず私の胸を往おう来らいするようになった。

しかし現在の私は今まのあたりに生きている。私の父ふ母ぼ、私の祖そ父ふ母ぼ、私の曾そう祖そ父ふ母ぼ、それから順次に溯さかのぼつて、百年、二百年、乃至ないし千年万年の間に馴じゆん致ちされた習慣を、私一

代で解脱する事ができないので、私は依然としてこの生に執着しているのである。

だから私の他に与える助言はどうしてもこの生の許す範囲内においてしなればすまないように思う。どういう風に生きて行くかという狭い区域のなかでばかり、私は人類の一人として他の人類の一人に向わなければならぬと思う。すでに生の中に活動する自分を認め、またその生の中に呼吸する他人を認める以上は、互いの根本義はいかに苦しくてもいかに醜くてもこの生の上に置かれたものと解釈するのが当り前であるから。

「もし生きているのが苦痛なら死んだら好いでしよう」

こうした言葉は、どんなに情なく世を観ずる人の口からも聞き得ないだろう。医者などは安らかな眠に赴むこうとする病人に、わざと注射の針を立てて、患者の苦痛を一刻でも延ばす工夫を凝らしている。こんな拷問に近い所作が、人間の徳義として許されているのを見ても、いかに根強く我々が生の一字に執着しているかが解る。私はついにその人に死をすすめる事ができなかつた。

その人はとても回復の見込みのつかないほど深く自分の胸を傷けられていた。同時にその傷が普通の人の経験にないような美しくしい思出の種となつてその人の面を輝やかしていた。

彼女はその美くしいものを宝石のごとく大事に永久彼女の胸の奥に抱き締めていたが、不幸にして、その美くしいものはとりも直さず彼女を死以上に苦しめる手傷そのものであった。二つの物は紙の裏表のごとくとうてい引き離せないのである。

私は彼女に向つて、すべてを癒す「時」の流れに従つて下れと云つた。彼女はもしそうしたらこの大切な記憶がしだいに剥げて行くだろうと嘆いた。

公平な「時」は大事な宝物を彼女の手から奪う代りに、その傷口もしだいに療治してくれるのである。烈しい生の歡喜を夢のように暈してしまふと同時に、今の歡喜に伴なう生々しい苦痛も取り除ける手段を怠たらないのである。

私は深い恋愛に根ざしている熱烈な記憶を取り上げても、彼女の創口から滴る血潮を「時」に拭わしめようとした。いくら平凡でも生きて行く方が死ぬよりも私から見た彼女には適当だったからである。

かくして常に生よりも死を尊いと信じている私の希望と助言は、ついにこの不愉快に充ちた生というものを超越する事ができなかつた。しかも私にはそれが実行上における自分を、凡庸な自然主義者として証拠立てたように見えてならなかつた。私は今でも半信半疑の眼でじつと自分の心を眺めている。

九

私が高等学校にいた頃、比較的親しく交際した友達の中に〇という人がいた。その時分からあまり多くの朋友を持たなかつた私には、自然〇と往來を繋くするような傾向があつた。私はたいてい一週に一度くらいの割で彼を訪ねた。ある年の暑中休暇などには、毎日欠かさず真砂町に下宿している彼を誘つて、大川の水泳場まで行つた。

〇は東北の人だから、口の利き方に私などと違つた鈍でゆつたりした調子があつた。そうしてその調子がいかにもよく彼の性質を代表しているように思われた。何度となく彼と議論をした記憶のある私は、ついに彼の怒つたり激したりする顔を見る事ができずにしまつた。私はそれだけでも充分彼を敬愛に価する長者として認めていた。

彼の性質が鷹揚であるごとく、彼の頭脳も私よりは遙かに大きかつた。彼は常に当時の私には、考えの及ばないような問題を一人で考えていた。彼は最初から理科へ入る目的をもつていながら、好んで哲学の書物などを繙いた。私はある時彼からスペンサーの第一原理という本を借りた事をいまだに忘れずにいる。

空の澄み切った秋日あきびより和などには、よく二人連れ立って、足の向く方へ勝手な話をしながら歩いて行つた。そうした場合には、往来へ堀へいごし越に差し出た樹きの枝から、黄色に染まった小さい葉が、風もないのに、はらはらと散る景色をよく見た。それが偶然彼の眼に触れた時、彼は「あッ悟つた」と低い声で叫んだ事があつた。ただ秋の色の空くうに動くのを美しくいと観ずるよりほかに能のない私には、彼の言葉が封じ込められた或秘密の符ふちよう徴として怪しい響を耳に伝えるばかりであつた。「悟りというものは妙なものだな」と彼はその後あとから平生のゆつたりした調子で独ひとりごと言のように説明した時も、私には一口の挨拶あいさつもできなかつた。

彼は貧生であつた。大観音おおがんのんの傍そばに間借をして自炊じすいしていた頃には、よく干から鮭さけを焼いて佗わびしい食卓に私を着かせた。ある時は餅菓子もちがしの代りに煮豆を買つて来て、竹の皮のまま双方から突つつき合つた。

大学を卒業すると間もなく彼は地方の中学に赴任した。私は彼のためにそれを残念に思つた。しかし彼を知らない大学の先生には、それがむしろ当然と見えたかも知れない。彼自身は無論平気であつた。それから何年かの後のちに、たしか三年の契約で、支那のある学校の教師に雇われて行つたが、任期が充みちて帰るとすぐまた内地の中学校長になつた。それ

も秋田から横手に遷されて、今では樺太の校長をしているのである。

去年上京したついでに久しぶりで私を訪ねてくれた時、取次のものから名刺を受取った私は、すぐその足で座敷へ行つて、いつもの通り客より先に席に着いていた。すると廊下伝に室の入口まで来た彼は、座蒲団の上にきちんと坐っている私の姿を見るや否や、

「いやに澄ましているな」と云つた。

その時向の言葉が終るか終らないうちに「うん」という返事がいつか私の口を滑つて出てしまった。どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、それほど自然に、それほど雑作なく、それほど拘泥わずに、するすると私の咽喉を滑り越したものだろうか。私はその時透明な好い心持がした。

十

向い合つて座を占めた〇と私とは、何より先に互の顔を見返して、そこにまだ昔のまの面影が、懐かしい夢の記念のように残っているのを認めた。しかしそれはあたかも古い心が新しい気分の中にぼんやり織り込まれていると同じ事で、薄暗く一面に霞んでい

た。恐ろしい「時」の威力に抵抗して、再びもとの姿に返る事は、二人にとつてもう不可能であつた。二人は別れてから今会うまでの間に挟はさまつている過去という不思議なものを顧かえりみない訳に行かなかつた。

〇は昔し林檎りんごのように赤い頬と、人一倍大きな丸い眼と、それから女に適したほどふつくりした輪廓りんかくに包まれた顔をもつていた。今見てもやはり赤い頬と丸い眼と、同じく骨張らない輪廓の持主ではあるが、それが昔しとはどこか違つている。

私は彼に私の口髭くちひげと揉もみ上げを見せた。彼はまた私のために自分の頭を撫なでて見せた。私のは白くなつて、彼のは薄く禿はげかかつているのである。

「人間も樺かばい太たまで行けば、もう行く先はなかるうな」と私が調戯からかうと、彼は「まあそんなものだ」と答えて、私のまだ見た事のない樺太の話をいろいろして聞かせた。しかし私は今それをみんな忘れてしまった。夏は大変好い所だという事を覚えていただけである。

私は幾年ぶりかで、彼といつしよに表へ出た。彼はフロックの上へ、とんびのような外が套いとうをぶわぶわに着ていた。そうして電車の中で釣つり革かわにぶら下りながら、隠袋かくしから手ハンケ帛チに包んだものを出して私に見せた。私は「なんだ」と訊きいた。彼は「栗くり饅まん頭じゆうだ」と答えた。栗饅頭は先刻さつき彼が私の宅うちにいた時に出した菓子であつた。彼がいつの間に、そ

れを手帛に包んだらうかと考えた時、私はちよつと驚かされた。

「あの栗饅頭を取つて来たのか」

「そうかも知れない」

彼は私の驚いた様子を馬鹿にするような調子でこう云つたなり、その手帛ハンケチの包をまたかくし隠袋に収めてしまった。

我々はその晩帝劇へ行つた。私の手に入れた二枚の切符に北側から入れという注意が書いてあつたのを、つい間違えて、南側へ廻ろうとした時、彼は「そつちじゃないよ」と私に注意した。私はちよつと立ち留まつて考えた上、「なるほど方角は樺かばふと太の方が確たしかなよ
うだ」と云いながら、また指定された入口の方へ引き返した。

彼は始めから帝劇を知っていると云つていた。しかし晩ばんさん餐を済ました後あとで、自分の席へ帰ろうとするとき、誰でもやる通り、二階と一階の扉ドアーを間違えて、私から笑われた。

折々隠袋から金縁きんぶちの眼鏡めがねを出して、手に持つた摺物すりものを読んで見る彼は、その眼鏡をはず除さずに遠い舞台を平気で眺めていた。

「それは老眼鏡じゃないか。よくそれで遠い所が見えるね」

「なにチャブドーだ」

私にはこのチャブドーという意味が全く解らなかつた。彼はそれを大差なしという支那語だと云つて説明してくれた。

その夜の帰りに電車の中で私と別れたぎり、彼はまた遠い寒い日本の領地の北の端はずれに行つてしまつた。

私は彼を想おもひ出すたびに、達たつじん人という彼の名を考える。するとその名がとくに彼のために天から与えられたような心持になる。そうしてその達人が雪と氷に鎖とぎされた北の果はてに、まだ中学校長をしているのだなと思う。

十一

ある奥さんがある女の人を私に紹介した。

「何か書いたものを見ていただきたいのだそうでございます」

私は奥さんのこの言葉から、頭の中でいろいろの事を考えさせられた。今まで私の所へ自分の書いたものを読んでくれと云つて来たものは何人ともなくある。その中には原稿紙の厚さで、一寸または二寸ぐらいの嵩かさになる大部のものも交つていた。それを私は時間の都

合の許す限りなるべく読んだ。そうして簡単な私はただ読みさえすれば自分の頼まれた義務を果したものと心得て満足していた。ところが先方では後から新聞に出してくれと云ったり、雑誌へ載せて貰いたいと頼んだりするのが常であった。中には他に読ませるのは手段で、原稿を金に換えるのが本来の目的であるように思われるのも少なくはなかった。私は知らない人の書いた読みにくい原稿を好意的に読むのがだんだん厭いやになって来た。

もつとも私の時間に教師をしていた頃から見ると、多少の弾力性ができてきたには相違なかった。それでも自分の仕事にかかれば腹の中はずいぶん多忙であった。親切ずくで見やろうと約束した原稿すら、なかなか埒らちのあかない場合もないとは限らなかつた。

私は私の頭で考えた通りの事をそのまま奥さんに話した。奥さんはよく私のいう意味を領解して帰って行つた。約束の女が私の座敷へ来て、座蒲団ざぶたんの上に坐つたのはそれから間もなくであった。佻わびしい雨が今にも降り出しそうな暗い空を、硝子戸ガラスどこし越に眺めながら、私は女にこんな話をした。――

「これは社交ではありません。御互に体裁ていさいの好い事ばかり云い合つては、いつまで経つたつて、啓発されるはずも、利益を受ける訳もないのです。あなたは思い切つて正直にならなければ駄目だめですよ。自分さえ充分に開放して見せれば、今あなたがどこに立つて

どっちを向いているかという實際が、私によく見えて来るのです。そうした時、私は始めてあなたを指導する資格を、あなたから与えられたものと自覚しても宜しいのです。だから私が何か云つたら、腹に答えべき或物を持つて以上、けつして黙つてはいけません。こんな事を云つたら笑われはしまいか、恥を搔きはしまいか、または失礼だといって怒られはしまいかなどと遠慮して、相手に自分という正体を黒く塗り潰した所ばかり示す工夫をするならば、私がいくらあなたに利益を与えようと焦慮ても、私の射る矢はことごとく空矢になつてしまうだけです。

「これは私のあなたに対する注文ですが、その代り私の方でもこの私というものを隠しは致しません。ありのままを曝け出すよりほかに、あなたを教える途はないのです。だから私の考えのどこかに隙があつて、その隙をもしあなたから見破られたら、私はあなたに私の弱点を握られたという意味で敗北の結果に陥るのです。教を受ける人だけが自分を開放する義務をもつていると思うのは間違つています。教える人も己れをあなたの前に打ち明けるのです。双方とも社交を離れて勘破し合うのです。

「そういう訳で私はこれからあなたの書いたものを拝見する時に、ずいぶん手ひどい事を思い切つて云うかも知れませんが、しかし怒つてはいけません。あなたの感情を害するた

めにいうのではないのですから。その代りあなたの方でも腑に落ちない所があつたらどこまでも切り込んでいらつしやい。あなたが私の主意を了解している以上、私はけつして怒るはずはありませんから。

「要するにこれはただ現状維持を目的として、上滑りな円滑を主位に置く社交とは全く別物なのです。解りましたか」

女は解つたと云つて歸つて行つた。

十二

私に短冊たんせきを書けの、詩を書けのと云つて来る人がある。そうしてその短冊やら続ぬめやらをまだ承諾もしないうちに送つて来る。最初のうちはせっかくの希望を無にするのも気の毒だという考から、拙ますい字とは思いながら、先方の云うなりになって書いていた。けれどもこうした好意は永続しにくいものと見えて、だんだん多くの人の依頼を無にするような傾向が強くなつて来た。

私はすべての人間を、毎日毎日恥を搔かくために生れてきたものだときえ考える事もある

のだから、変な字を他に送つてやるくらいの所作は、あえてしようと思えば、やれないとも限らないのである。しかし自分が病氣のとき、仕事の忙がしい時、またはそんな真似のしたくない時に、そういう注文が引き続いて起つてくると、実際弱らせられる。彼らの多くは全く私の知らない人で、そうして自分達の送つた短冊を再び送り返すこちらの手数さえ、まるで眼中に置いていないように見えるのだから。

そのうちで一番私を不愉快にしたのは播州の坂越にいる岩崎という人であつた。この人は数年前よく端書で私に俳句を書いてくれと頼んで来たから、その都度向うのいう通り書いて送つた記憶のある男である。その後の事であるが、彼はまた四角な薄い小包を私に送つた。私はそれを開けるのさえ面倒だったから、ついそのままにして書齋へ放り出しておいたら、下女が掃除をする時、つい書物と書物の間へ挟み込んで、まず体よくしまひ失くした姿にしてしまった。

この小包と前後して、名古屋から茶の缶が私宛で届いた。しかし誰が何のために送つたものかその意味は全く解らなかつた。私は遠慮なくその茶を飲んでしまつた。するとほどなく坂越の男から、富士登山の画を返してくれと云つてきた。彼からそんなものを貰つた覚のない私は、打ちやつておいた。しかし彼は富士登山の画を返せ返せと三度も四度

も催促してやまない。私はついにこの男の精神状態を疑い出した。「大^{おお}方^{かた}気違だろ。」私は心の中でこうきめたなり向うの催促にはいつさい取り合わない事にした。

それから二三カ月経^たった。たしか夏の初の頃と記憶しているが、私はあまり乱雑に取り散らされた書齋の中に坐^{すわ}っているのがうつとうしくなったので、一人でぼつぼつそこいらを片づけ始めた。その時書物の整理をするため、好い加減に積み重ねてある字引や参考書を、一冊ずつ改めて行くと、思いがけなく坂越の男が寄こした例の小包が出て来た。私は今まで忘れていたものを、眼^まのあたり見て驚ろいた。さつそく封を解^といて中を検^{しら}べたら、小さく畳んだ画が一枚入っていた。それが富士登山の図だったので、私はまた吃^{びっくり}驚した。包のなかにはこの画のほかには手紙が一通添えてあって、それに画の賛をしてくれという依頼と、御礼に茶を送るといふ文句が書いてあった。私はいよいよ驚ろいた。

しかしその時の私はどうい富士登山の図などに賛をする勇氣をもっていなかった。私の気分が、そんな事とは遙^{はる}か懸^かけ離れた所にあつたので、その画に調和するような俳句を考えている暇がなかつたのである。けれども私は恐縮した。私は丁^{てい}寧^{ねい}な手紙を書いて、自分の怠慢を謝した。それから茶の御礼を云つた。最後に富士登山の図を小包にして返した。

十三

私はこれで一段落いちだんらくついたものと思つて、例の坂越さかこしの男の事を、それぎり念頭に置かなかつた。するとその男がまた短冊を封じて寄よこした。そうして今度は義士ぎしに關係のある句を書いてくれというのである。私はそのうち書こうと云つてやった。しかしなかなか書く機会が来なかつたので、ついそのままになつてしまつた。けれども執濃しつこいこの男の方では、かつしてそのままに済ます気はなかつたものと見えて、むやみに催促せいきを始め出した。その催促は一週に一遍か、二週に一遍の割できつと来た。それが必ず端書はがきに限つていて、その書き出しには、必ず「拜啓失敬申し候えども」とあるにきまつていた。私はその人の端書を見るのがだんだん不愉快になつて来た。

同時に向うの催促も、今まで私の予期していなかつた変な特色を帯びるようになった。最初には茶をやつたではないかという言葉が見えた。私がそれに取り合わずにいると、今度はあの茶を返してくれという文句に改たまつた。私は返す事はたやすいが、その手数てかずが面倒だから、東京まで取りに来れば返してやると云つてやりたくなつた。けれども坂越の

男にそういう手紙を出すのは、自分の品格に關わるような気がしてあえてし切れなかった。返事を受け取らない先方はなおの事催促をした。茶を返さないならそれでも好いから、金一円をその代価として送って寄せせというのである。私の感情はこの男に對してしだいに荒んで来た。しまいにはとうとう自分を忘れるようになった。茶は飲んでしまった、短冊は失くしてしまった。以来端書を寄こす事はいつさい無用であると書いてやった。そうして心のうちで、非常に苦々しい気分を経験した。こんな非紳士的な挨拶をしなければならぬような穴の中へ、私を追い込んだのは、この坂越の男であると思つたからである。こんな男のために、品格にもせよ人格にもせよ、幾分の墮落を忍ばなければならぬのかと考えると情なかつたからである。

しかし坂越の男は平氣であつた。茶は飲んでしまい、短冊は失くしてしまふとは、余りと申せば……とまた端書に書いて来た。そうしてその冒頭には依然として拝啓失敬申し候えどもという文句が規則通り繰り返されていた。

その時私はもうこの男には取り合ふまいと決心した。けれども私の決心は彼の態度に對して何の効果のあるはずはなかつた。彼は相變らず催促をやめなかつた。そうして今度は、もう一度書いてくれれば、また茶を送つてやるがどうだと云つて来た。それから事いやし

くも義士に関するのだから、句を作っても好いだらうと云つて来た。

しばらく端書が中絶したと思うと、今度はそれが封書に変わった。もつともその封筒は区役所などで使う極めて安い鼠色ねずみいろのものであつたが、彼はわざとそれに切手を貼はらないのである。その代り裏に自分の姓名も書かずに投函とうかんしていた。私はそれがために、倍の郵税を二度ほど払わせられた。最後に私は配達夫に彼の氏名と住所とを教えて、封のまま先方へ逆送して貰つた。彼はそれで六錢取られたせいか、ようやく催促を断念したらしい態度になつた。

ところが二カ月ばかり経つて、年が改まると共に、彼は私に普通の年始状を寄こした。それが私をちよつと感心させたので、私はつい短冊へ句を書いて送る氣になつた。しかしその贈物は彼を満足させるに足りなかつた。彼は短冊が折れたとか、汚よごれたとか云つて、しきりに書き直しを請求してやまない。現に今年の正月にも、「失敬申し候えども……」という依頼状ななようかが七八日頃ななようかに届いた。

私がかんな人に出会つたのは生れて始めてである。

十四

ついこの間昔し私の家へ泥棒の入った時の話を比較的詳しく聞いた。

姉がまだ二人とも嫁づかずになっていた時分の事だというから、年代にすると、多分私の生れる前後に当るのだろう、何しろ勤王とか佐幕とかいう荒々しい言葉の流行ったやかましい頃なのである。

ある夜一番目の姉が、夜中に小用に起きた後、手を洗うために、潜戸を開けると、狭い中庭の隅に、壁を押しつけるような勢で立っている梅の古木の根方が、かつと明るく見えた。姉は思慮をめぐらす暇もないうちに、すぐ潜戸を締めてしまったが、締めたあとで、今目前に見た不思議な明るさをそこに立ちながら考えたのである。

私の幼心に映ったこの姉の顔は、いまだに思い起そうとすれば、いつでも眼の前に浮かぶくらい鮮かである。しかしその幻像はすでに嫁に行つて齒を染めたあとの姿であるから、その時縁側に立って考えていた娘盛りの彼女を、今胸のうちに描き出す事はちよつと困難である。

広い額、浅黒い皮膚、小さいけれども明確した輪廓を具えている鼻、人並より大きい一二重瞼の眼、それから御沢という優しい名、——私はただこれらを綜合して、そ

の場合における姉の姿を想像するだけである。

しばらく立つたまま考えていた彼女の頭に、この時もしかすると火事じやないかという懸念けねんが起つた。それで彼女は思い切つてまた切戸きりどを開けて外を覗のぞこうとする途端とたんに、一本の光る抜身ぬきみが、闇やみの中から、四角に切つた潜戸の中へすうと出た。姉は驚いて身を後あとへ退ひいた。その隙ひまに、覆面をした、龕灯がんどう提灯ちようちんを提さげた男が、抜刀のまま、小さい潜戸から大勢家うちの中へ入つて来たのださうである。泥棒の人数にんずはたしか八人とか聞いた。

彼らは、他ひとを殺あやめるために来たのではないから、おとなしくしてくれさえすれば、家のものに危害は加えない、その代り軍用金を借かせと云つて、父に迫つた。父はないと断つた。しかし泥棒はなかなか承知しなかつた。今角かどの小倉屋こくらやという酒屋へ入つて、そこで教えられて来たのだから、隠しても駄目だと云つて動かかなかつた。父は不精無性ふしようぶしょうに、とうとう何枚かの小判を彼らの前に並べた。彼らは金額があまり少な過ぎると思つたものか、それでもなかなか帰ろうとしないので、今まで床の中に寝ていた母が、「あなたの紙入に入っているのもやつておしまいなさい」と忠告した。その紙入の中には五十両ばかりあつたとかいう話である。泥棒が出て行つたあとで、「余計な事をいう女だ」と云つて、父は母を叱りつけたさうである。

その事があつて以来、私の家では柱を切り組きくみにして、その中へあり金を隠す方法を講じたが、隠すほどの財産もできず、また黒装束くろそうぞくを着けた泥棒も、それぎり来ないので、私の生長する時分には、どれが切組きりくみにしてある柱かまるで分らなくなつていた。

泥棒が出て行く時、「この家は大変しま締りの好い宅だ」と云つて賞めたほそうだが、その締りの好い家を泥棒に教えた小倉屋の半兵衛さんの頭には、あくる日から擦り傷かすきずがいくつとなくできた。これは金はありませんと断わるたびに、泥棒がそんなはずがあるものかと云つては、抜身の先でちよいちよい半兵衛さんの頭を突ツついたのである。それでも半兵衛さんは、「どうしても宅うちにはありません、裏の夏目さんにはたくさんあるから、あそこへいらつしやい」と強情を張り通して、とうとう金は一文も奪とられずじまつた。

私はこの話を妻さいから聞いた。妻はまたそれを私の兄から茶受話ちやうけばなしに聞いたのである。

十五

私が去年の十一月学習院で講演をしたら、薄謝と書いた紙包を後から届けてくれた。立派な水引みずひきがかかっているので、それを除はずして中を改めると、五円札が二枚入つていた。

私はその金を平生から気の毒に思っていた、或懇意な芸術家に贈ろうかしらと思つて、暗あんに彼の来るのを待ち受けていた。ところがその芸術家がまだ見えない先に、何か寄附の必要ができてきたりして、つい二枚とも消費してしまつた。

一口でいうと、この金は私にとつてけつして無用なものではなかつたのである。世間の通り相場で、立派に私のために消費されたというよりほかに仕方がないのである。けれどもそれを他ひとにやろうとまで思つた私の主観から見れば、そんなにありがたみの附着してない金には相違なかつたのである。打ち明けた私の心持をいうと、こうした御礼を受けるより受けない時の方がよほど颯さつぱり爽すわいしていた。

畔くろやなぎかいしゆう柳ちよぎゆうかい芥舟君が樗牛会ちよぎゆうかいの講演の事で見えた時、私は話のついでとして一通りその理由を述べた。

「この場合私は労力を売りに行つたのではない。好意づくで依頼に応じたのだから、向うでも好意だけで私に酬むくいたらよかろうと思う。もし報酬問題とする気なら、最初から御礼はいくらするが、来てくれるかどうかと相談すべきはずでしょう」

その時K君は納得なつとくできないといったような顔をした。そうしてこう答えた。

「しかしどうでしょう。その十円はあなたの労力を買ったという意味でなくつて、あなた

に対する感謝の意を表する一つ的手段と見たら。そう見る訳には行かないのですか」

「品物なら判然はつきりそう解釈もできるのですが、不幸にも御礼が普通營業的の売買ばいばいに使用する金なので、どっちとも取れるのです」

「どっちとも取れるなら、この際善意さいいの方に解釈した方が好くはないでしょうか」

私はもつともだとも思った。しかしまたこう答えた。

「私は御存じの通り原稿料で衣食しているくらいですから、無論富裕とは云えません。しかしどうかこうか、それだけで今日こんにちを過ごして行かれるのです。だから自分の職業以外の事にかけては、なるべく好意的に人のために働いてやりたいという考えを持っています。そうしてその好意が先方に通じるのが、私にとっては、何よりも尊たつとい報酬なのです。したがって金などを受けると、私が入のために働いてやるといふ余地、——今の私にはこの余地がまた極めて狭いのです。——その貴重な余地を腐蝕ふしよくさせられたような心持になります」

K君はまだ私の云う事を肯うけがわない様子であつた。私も強情であつた。

「もし岩崎とか三井とかいう大富豪に講演を頼むとした場合に、後から十円の御礼を持って行くでしょうか、あるいは失礼だからと云つて、ただ挨拶あいさつだけにとどめておくでしよ

うか。私の考ではおそらく金銭は持つて行くまいと思うのですが」

「さあ」といっただけでK君は判然した返事を与えなかつた。私にはまだ云う事が少し残つていた。

「己惚おのぼれかは知りませんが、私の頭は三井岩崎に比べるほど富んでいないにしても、一般学生よりはずっと金持に違いないと信じています」

「そうですとも」とK君は首肯うなずいた。

「もし岩崎や三井に十円の御礼を持つて行く事が失礼ならば、私の所へ十円の御礼を持つて来るのも失礼でしょう。それもその十円が物質上私の生活に非常な潤うるおい沢ひとを与えるなら、またほかの意味からこの問題を眺める事もできるでしょうが、現に私はそれを他にやろうとまで思つたのだから。——私の現下の経済的生活は、この十円のために、ほとんど目に立つほどの影響を蒙こうむらないのだから」

「よく考えて見ましょう」といったK君はにやにや笑いながら歸つて行つた。

十六

宅うちの前のだらだら坂を下りると、一間ばかりの小川に渡した橋があって、その橋向うのすぐ左側に、小さな床屋が見える。私はたった一度そこで髪を刈かつて貰もらった事がある。

平生は白い金かなきん中の幕で、硝子戸ガラスドの奥が、往来から見えないようにしてあるので、私はその床屋の土間に立つて、鏡の前に座を占めるまで、亭主の顔をまるで知らずにいた。

亭主は私の入ってくるのを見ると、手に持った新聞紙を放り出してすぐ挨拶あいさつをした。

その時私はどうもどこかで会った事のある男に違ちがないという気がしてならなかった。それで彼が私の後うしろへ廻まわつて、鉢はちまをちよきちよき鳴らし出した頃を見計らつて、こつちから話を持ちかけて見た。すると私の推察通り、彼は昔むかし寺町の郵便局の傍そばに店を持って、今と同じように、散髪とせいを渡世とせいとしていた事が解とつた。

「高田の旦那だんななどにもだいぶ御世話になりました」

その高田というのは私の従兄いとこなのだから、私も驚いた。

「へえ高田を知つてるのかい」

「知つてるどころじゃございません。始終しじゆうとく徳とく、つて鼻ひいき根ねにして下すつたもんです」
彼の言葉遣づかいはこういう職人にしてはむしろ丁寧ていねいな方であつた。

「高田も死んだよ」と私がいうと、彼は吃驚びつくりした調子で「へッ」と声を揚あげた。

「いい旦那でしたがね、惜しい事に。いつ頃御亡しろうおなくなりになりました」

「なに、つい此こないだ間まき。今日で二週間になるか、ならないぐらいのものだろう」

彼はそれからこの死んだ従兄いとこについて、いろいろ覚えてゐる事を私に語つた末、「考え
ると早いもんですね旦那、つい昨日きのうの事としつきや思われぬのに、もう三十年近くにも
なるんですから」と云つた。

「あのそら求友亭きゆうゆうていの横町にいらしてね、……」と亭主はまた言葉を継ぎ足した。

「うん、あの二階のある家うちだろう」

「ええ御二階がありましたつけ。あすこへ御移りになつた時なんか、方々ほうぼう様さまから御祝ごしゆいい物
なんかあつて、大變御盛ごさかんでしたがね。それから後あとでしたつけか、行願寺ぎようがんじの寺内じないへ御引
越こなすつたのは」

この質問は私にも答えられなかつた。実はあまり古い事なので、私もつい忘れてしまつ
たのである。

「あの寺内も今じや大變變つたようだね。用がないので、それからつい入つて見た事もな
いが」

「變つたの變らないのつてあなた、今じやまるで待合ばかりでさあ」

私は肴町さかなまちを通るたびに、その寺内へ入る足袋屋の角の細い小路こうじの入口に、ごたごた掲げられた四角な軒灯の多いのを知っていた。しかしその数を勘定かんじょうして見るほどの道楽気も起らなかつたので、つい亭主のいう事には気がつかずにいた。

「なるほどそう云えば誰が袖そでなんて看板が通りから見えるようだね」

「ええたくさんできましたよ。もつとも変るはずですね、考えて見ると。もうやがて三十年にもなろうと云うんですから。旦那も御承知の通り、あの時分は芸者屋つたら、寺内にたつた一軒しきや無かつたもんでさあ。東家あずまやつてね。ちようどそら高田の旦那まんむこの真向まっこうでしたらう、東家の御神灯ごしんとうのぶら下がっていたのは」

十七

私はその東家をよく覚えていた。従兄いとこの宅うちのついで向むこうなので、両方のものが出入りのたびに、顔を合わせさえすれば挨拶あいさつをし合うぐらいの間柄あいだがらであつたから。

その頃従兄の家には、私の二番目の兄がごろごろしていた。この兄は大の放蕩ほうとうもので、よく宅の懸物かけものや刀剣類を盗み出しては、それを二束三文に売り飛ばすという悪い癖くせがあ

った。彼が何で従兄の家に転がり込んでいたのか、その時の私には解らなかつたけれども、今考えると、あるいはそうした乱暴を働らいた結果、しばらく家を追い出されていたらかも知れないと思う。その兄のほかに、まだ庄さんという、これも私の母方の従兄に当る男が、そこいらにぶらぶらしていた。

こういふ連中がいつでも一つ所に落ち合つては、寝そべつたり、縁側へ腰をかけたたりして、勝手な出放題を並べていると、時々向うの芸者屋の竹格子の窓から、「今日は」などと声をかけられたりする。それをまた待ち受けてでもいるごとくに、連中は「おいちよつとおいで、好いものあるから」とか何とか云つて、女を呼び寄せようとする。芸者の方でも昼間は暇だから、三度に一度は御愛嬌に遊びに来る。といった風の調子であつた。私はその頃まだ十七八だつたらう、その上大変な羞恥屋で通つていたので、そんな所に居合わしても、何にも云わずに黙つて隅の方に引込んでばかりいた。それでも私は何かの拍子で、これらの人々といつしよに、その芸者屋へ遊びに行つて、トランプをした事がある。負けたものは何か奢らなければならぬので、私は人の買った寿司や菓子などを食べた。

一週間ほど経つてから、私はまたこののらくらの兄に連れられて同じ宅へ遊びに行つた

ら、例の庄さんも席に居合わせて話がだいぶはずんだ。その時咲松さきまつという若い芸者が私の顔を見て、「またトランプをしましょう」と云った。私は小倉こくらの袴はかまを穿はいて四角張よしかたつていたが、懐中には一銭の小遣こづかいさえ無かつた。

「僕は銭ぜにがないから厭いやだ」

「好わたくしいわ、私わたしが持つてるから」

この女はその時眼を病んででもいたのだらう、こういいいい、綺麗きれいな襦袢じゆばんの袖そででしきりに薄赤うすあかくなつた二重ふたえまぶら瞼こすを擦こすつていた。

その後ご私は「御作おやくが好おやくい御客おやくに引ひかされた」という噂うわさを、従兄いとこの家うちで聞いた。従兄の家では、この女の事を咲松さきまつと云いわないで、常に御作御作おやくおやくと呼よんでいたのである。私はその話を聞いた時、心の内でもう御作おやくに会あう機会きかいも来こないだらうと考かんえた。

ところがそれからだいぶ経へつて、私わたしが例の達人たつじんといっしょに、芝しばの山内さんないの勸工場かんこうばへ行いつたら、そこでまたぱつたり御作おやくに出い会あつた。こちらの書生姿しよせいそに引ひき易かえて、彼女はもう品ひんの好おやくい奥様おくさまに變かつていた。旦那だんなというのも彼女の傍そばについていた。……

私は床屋の亭主の口から出た東家あずまやという芸者屋の名前の奥ひそに潜ひそんでいるこれだけの古い事実を急に思おもい出したのである。

「あすここにいた御作という女を知ってるかね」と私は亭主に聞いた。

「知ってるどころか、ありや私の姪めいでさあ」

「そうかい」

私は驚ろいた。

「それで、今どこにいるのかね」

「御作は亡なくなりましたよ、旦那」

私はまた驚ろいた。

「いつ」

「いつつて、もう昔の事になりますよ。たしかあれが二十三の年でしたらう」

「へええ」

「しかも浦塩ウラジオで亡くなったんです。旦那が領事館に關係のある人だったもんですから、

あつちへいつしよに行きましてね。それから間もなくでした、死んだのは」

私は帰つて硝子戸ガラスドの中に坐つて、まだ死なずにいるものは、自分とあの床屋の亭主だけ

のような気がした。

十八

私の座敷へ通されたある若い女が、「どうも自分の周囲まわりがきちんと片づかないで困りますが、どうしたら宜よろしいものでしょう」と聞いた。

この女はある親戚の宅うちに寄寓ききゆうしているので、そこが手狭てせまな上に、子供などが蒼蠅うつるぎのだらうと思つた私の答は、すこぶる簡単であつた。

「どこかさっぱりした家うちを探して下宿でもしたら好いでしよう」

「いえ部屋の事ではないので、頭の中がきちんと片づかないで困るのです」

私は私の誤解を意識すると同時に、女の意味がまた解らなくなった。それでもう少し進んだ説明を彼女に求めた。

「外からは何でも頭の中に入って来ますが、それが心の中心と折合あはつかないのです」

「あなたのいう心の中心とはいつたいいんなものですか」

「どんなものと云つて、真直まつすぐな直線なのです」

私はこの女の数学に熱心な事を知つていた。けれども心の中心が直線だという意味は無論私に通じなかつた。その上中心とははたして何を意味するのか、それもほとんど不可解

であった。女はこう云った。

「物には何でも中心がございましょう」

「それは眼で見える事ができ、尺^{ものさし}度で計る事のできる物体についての話でしょう。心にも形があるんですか。そんならその中心というものをここへ出して御覧なさい」

女は出せるとも出せないとも云わずに、庭の方を見たり、膝^{ひざ}の上で両手を擦^すったりしていた。

「あなたの直線というのは比^{たとえ}喩^えじやありませんか。もし比喩なら、円^{まる}と云っても四角と云っても、つまり同じ事になるのでしよう」

「そうかも知れませんが、形や色が始^{しじゆう}終^{ゆう}変^{へん}つているうちに、少しも変らないものが、どうしてもあるのです」

「その変るものと変らないものが、別々だとすると、要するに心が二つある訳になります。それが、それで好いのですか。変るものはすなわち変らないものでなければならぬはずじゃありませんか」

こう云った私はまた問題を元に返して女に向った。

「すべて外界のものが頭のなかに入つて、すぐ整然と秩序なり段落なりがはつきりするよ

うに納まる人は、おそろくないでしょう。失礼ながらあなたの年齢や教育や学問で、そうきちんと片づけられる訳がありません。もしまたそんな意味でなくって、学問の力を借りずに、徹底的にどさりと納まりをつけたいなら、私のようなものの所へ来ても駄目です。坊さんの所へでもいらつしやい」

すると女が私の顔を見た。

「私は始めて先生を御見上げ申した時に、先生の心はそういう点で、普通の人以上に整つていらつしやるように思いました」

「そんなはずがありません」

「でも私にはそう見えません。内臓の位置までが調つていらつしやるとしか考えられませんでした」

「もし内臓がそれほど具合よく調節されているなら、こんなに始終病氣などはしません」
「私は病氣にはなりません」とその時女は突然自分の事を云った。

「それはあなたが私より偉い証拠です」と私も答えた。

女は蒲団を滑り下りた。そうして、「どうぞ御身体を御大切に」と云って帰って行つた。

十九

私の旧宅は今私の住んでいる所から、四五町奥の馬場下という町にあった。町とは云い
 条、その実じつ小さな宿場としか思われなくらい、小供の時の私には、寂さびれ切きつてかつ淋さむし
 く見えた。もともと馬場下とは高田の馬場の下にあるという意味なのだから、江戸絵図で
 見ても、朱引内しゅびきうちか朱引外しゅびきうちか分らない辺鄙へんびな隅すみの方かたにあったに違ちがいなのである。

それでも内蔵造くらづくりの家うちが狭い町内に三四軒はあつたろう。坂を上あがると、右側に見える近お
 江屋伝兵衛うみやでんべえという薬種屋やくしゅやなどはその一つであつた。それから坂を下おり切きつた所に、間口
 の広い小倉屋こくらやという酒屋もあつた。もつともこの方は倉造りではなかつたけれども、堀部ほり
 安兵衛べやすべえが高田の馬場かたきで敵を打つ時に、ここへ立ち寄よつて、枡ます酒さけを飲のんで行いつたという
 履歴りふりのある家柄いえがらであつた。私はその話を小供の時分から覚えていたが、ついぞそこにし
 まつてあるという噂うわさの安兵衛が口を着けた枡ますを見たことがなかつた。その代り娘むすめの御北おきたさ
 んの長唄ながうたは何度となく聞いた。私は小供だから上手だか下手だかまるで解とらなかつたけ
 れども、私の宅うちの玄関げんかんから表へ出る敷石の上に立つて、通りへでも行いこうとすると、御北

さんの声がそこからよく聞こえたのである。春の日の午過ひるすぎなどに、私はよく恍惚うつとりとした魂を、麗うららかな光に包みながら、御北おきたさんの御浚おさらいを聴くでもなく聴かぬでもなく、ぼんやり私の家の土蔵の白壁に身を靠もたせて、佇立たたずんでいた事がある。その御蔭おかげで私はどうとう「旅の衣ころもは篠懸すずかけの」などという文句をいつの間にか覚えてしまった。

このほかには棒屋が一軒あった。それから鍛冶屋かじやも一軒あった。少し八幡坂はちまんざかの方へ寄った所には、広い土間を屋根の下に囲い込んだやちや場ばもあった。私の家のものは、この主人を、問屋とんやの仙太郎さんと呼んでいた。仙太郎さんは何でも私の父とごく遠い親類つづきになつてゐるんだとか聞いたが、交際つきあいからいうと、まるで疎濶そかつであつた。往来で行き会ふ時だけ、「好い御天気で」などと声をかけるくらいの間柄あいだがらに過ぎなかつたらしく思われる。この仙太郎さんの一人娘が講釈師の貞水ていすいと好い仲になつて、死ぬの生きるのという騒ぎのあつた事も人聞ひとききに聞いて覚えてはいるが、纏まとまつた記憶は今頭のどこにも残つていない。小供の私には、それよりか仙太郎さんが高い台の上に腰をかけて、矢立やたてと帳面を持つたまま、「いやつちやいくら」と威勢の好い声で下にいる大勢の顔を見渡す光景の方がよつぽど面白かつた。下からはまた二十本も三十本もの手を一度に挙あげて、みんな仙太郎さんの方を向きながら、ろんじだのがれんだのという符徴ふちようを、罵ののしるよう

に呼び上げるうちに、薑しょうや茄子なすや唐茄子とうの籠かごが、それらの節ふし太ぶとの手で、どしどしどこかへ運び去られるのを見ているのも勇ましかつた。

どんな田舎いなかへ行つてもありがちな豆腐屋とうふやは無な論ろんあつた。その豆腐屋には油あぶらの臭においの染しみ込こんだ縄なわ暖簾のれんがかかつていて門かど口ぐちを流れる下水の水が京都へでも行つたように綺麗きれいだつた。その豆腐屋について曲ると半町ほど先に西せい閑かん寺じという寺の門が小高く見えた。赤く塗ぬられた門うしろの後は、深い竹たけ藪やぶで一面に掩おほわれているので、中にどんなものがあるか通りからは全く見えなかつたが、その奥おくでする朝晩あつとめの御勤おつとめの鉦かねの音ねは、今でも私の耳に残のこっている。ことに霧きりの多い秋から木こ枯がらしの吹く冬へかけて、カンカンと鳴る西閑寺の鉦の音は、いつでも私の心に悲しくて冷つめたい或物たたを叩たたき込むように小さい私の気分を寒くした。

二十

この豆腐屋の隣よせに寄席よせが一軒あつたのを、私は夢ゆめ幻うつのようにまだ覚えている。こんな場末ひとよせに人寄場よせのあるうはずがないというのが、私の記憶かすみに霞かすみをかけるせいだろう、私はそれを思い出すたびに、奇異な感じに打たれながら、不思議そうな眼を見張つて、遠い

私の過去をふり返るのが常である。

その席亭の主人あるじというのは、町内の鳶頭とびがしらで、時々目暗縞めくらじまの腹掛はらかけに赤い筋すじの入った印しるし絆纏ばんてんを着て、突っかけ草履ぞうりか何かでよく表を歩いていた。そこにまた御藤おふじさんという娘があつて、その人の容色きりようがよく家のものものに上のぼつた事も、まだ私の記憶を離れずにいる。後のちには養子を貰つたが、それが口髭くちひげを生はやした立派な男だったので、私はちよつと驚ろかされた。御藤さんの方でも自慢の養子だという評判が高かつたが、後から聞いて見ると、この人はどこかの区役所の書記だとかいう話であつた。

この養子が来る時分には、もう寄席よせもやめて、しもうた屋やになつていたようであるが、私はその宅うちの軒先のきりにまだ薄暗い看板かんばんが淋さむしそうに懸かかつていた頃、よく母から小遣こづかいを貰つてそこへ講釈こうしゃくを聞きに出かけたものである。講釈師の名前はたしか、南麟なんりんとかいつた。不思議な事に、この寄席へは南麟よりほかに誰も出なかつたようである。この男の家うちはどこにあつたか知らないが、どの見当けんとうから歩いて来るにしても、道普請みちぶしんができて、家いえ並みの揃そろつた今から見れば大事業に相違たぐなかつた。その上客の頭数あたまかずはいつでも十五か二十くらいなのだから、どんなに想像たぐを逞たくましくしても、夢としか考えられないのである。「もうしもうし花魁おいらんえ、と云われて八ツ橋はしなんざますえとふり返る、途端とたんに切り込やいばむ刃

の光」という変な文句は、私はその時分南隣から教わったのか、それとも後になって落語家のやる講釈師の真似から覚えたのか、今では混雑してよく分らない。

当時私の家からまず町らしい町へ出ようとするには、どうしても人氣のない茶 畠と
か、竹 藪とかまたは長い 田圃路とかを通り抜けなければならなかった。買物らしい買物はたいてい神楽坂まで出る例になつていたので、そうした必要に馴らされた私に、さした苦痛のあるはずもなかったが、それでも矢来の坂を上つて酒井様の火の見櫓を通り越して寺町へ出ようという、あの五六町の一筋道などになると、昼でも陰森として、大空が曇つたように始終薄暗かつた。

あの土手の上に 一抱も三抱えもあるという大木が、何本となく並んで、その隙間をまた大きな竹藪で塞いでいたのだから、日の目を拝む時間と云つたら、一日のうちにおそらくただの一刻もなかったのだろう。下町へ行こうと思つて、日和下駄などを穿いて出ようものなら、きつと非道い目にあうにきまつていた。あすこの霜融は雨よりも雪よりも恐ろしいもののように私の頭に染み込んでゐる。

そのくらい不便な所でも火事の虞はあったものと見えて、やっぱり町の曲り角に高い梯子が立つていた。そうしてその上に古い半鐘も型のごとく釣るしてあつた。私はこうした

ありのままの昔をよく思い出す。その半鐘のすぐ下にあつた小さな一膳飯屋いちぜんめしやもおのずと眼先に浮かんで来る。縄暖簾なわのれんの隙間からあたたかそうな煮めにしめの香が煙と共に往来へ流れ出して、それが夕暮の霽もやに融け込んで行く趣おもむきなども忘れる事ができない。私が子規のまだ生きているうちに、「半鐘と並んで高き冬木哉かな」という句を作つたのは、実はこの半鐘の記念のためであつた。

二十一

私の家に関する私の記憶は、惣そうじてこういう風に鄙ひなびている。そうしてどこかに薄ら寒い憐あわれな影を宿している。だから今生き残つている兄から、つい此間こないだ、うちの姉達が芝居に行つた当時の様子を聴いた時には驚ろいたのである。そんな派出はでな暮しをした昔もあつたのかと思うと、私はいよいよ夢のような心持になるよりほかはない。

その頃の芝居小屋はみんな猿さる若町わかちようにあつた。電車も俾くるまもない時分に、高田の馬場の下から浅草の観音様の先まで朝早く行き着こうと云うのだから、たいていの事ではなかつたらしい。姉達はみんな夜半よなかに起きて支度したくをした。途中が物騒ぶつそうだというので、用心のた

め、下男がきつと供ともをして行つたそうである。

彼らは筑土つくどを下りて、柿の木横町から揚場あげばへ出て、かねてその船宿にあつらえておいた屋根船に乗るのである。私は彼らがいかに予期に充ちた心をもって、のろのろ砲兵ほうへいしゅう工しやう廠ちやうの前から御茶の水を通り越して柳橋まで漕こがれつつ行つただらうと想像する。しかも彼らの道中はけつしてそこで終りを告げる訳に行かないのだから、時間に制限をおかなかつたその昔がなおさら回顧の種になる。

大川へ出た船は、流を溯さかのほつて吾妻橋あずまばしを通り抜けて、今戸いまどの有明楼ゆうめいろうの傍そばに着けたものだという。姉達はそこから上あがつて芝居茶屋まで歩いて、それからようやく設けの席につくべく、小屋へ送られて行く。設けの席というのは必ず高土間たかどまに限られていた。これは彼らの服装なりなり顔なり、髪飾なりなりが、一般の眼によく着く便利のいい場所なので、派出所を好む人達が、争つて手に入れたがるからであつた。

幕の間には役者に随ついている男が、どうぞ楽屋へお遊びにいらつしやいましと云つて案内に来る。すると姉達はこの縮ちぢめん緬ちんの模様のある着物の上に袴はかまを穿はいた男のあと後に跟ついて、田之助たのすけとか訥とつしやう升しょうとかいふ鼻眞ひしきの役者の部屋へ行つて、扇子せんすに画えなどを描かいて貰かつて帰つてくる。これが彼らの見栄みえだつたのだらう。そうしてその見栄は金の力でなければ買え

なかつたのである。

帰りには元来た路を同じ舟で揚場まで漕ぎ戻す。無要心だからと云つて、下男がまた

提灯を点けて迎に行く。宅へ着くのは今の時計で十二時くらいにはなるのだろう。だ

から夜半から夜半までかかつて彼らはようやく芝居を見る事ができたのである。……

こんな華麗な話を聞くと、私ははたしてそれが自分の宅に起つた事か知らんと疑いたくなる。どこか下町の富裕な町家の昔を語られたような気もする。

もつとも私の家も侍分ではなかつた。派出な付合をしなければならぬ名主とい

う町人であつた。私の知っている父は、禿頭の爺さんであつたが、若い時分には、一

中節を習つたり、馴染の女に縮緬の積夜具をしてやつたりしたのでさうである。青

山に田地があつて、そこから上つて来る米だけでも、家のものが食うには不足がなかつた

とか聞いた。現に今生き残っている三番目の兄などは、その米を舂く音を始終聞いたと

云つている。私の記憶によると、町内のものがみんなして私の家を呼んで、玄関玄関と称

えていた。その時分の私には、どういう意味か解らなかつたが、今考えると、式台のつ

た厳めしい玄関付の家は、町内にたつた一軒しかなかつたからだろうと思う。その式台を

上つた所に、突棒や、袖搦や刺股や、また古ぼけた馬上提灯などが、並んで懸

けてあつた昔なら、私でもまだ覚えている。

二十二

この二三年來私はたいてい年に一度ぐらいの割で病氣をする。そうして床とこについてから床を上げるまでに、ほほひとつき一月のひかず日数を潰つぶしてしまう。

私の病氣と云えば、いつもきまつた胃の故障なので、いざとなると、絶食療法よりほかに手の着けようがなくなる。医者いしやの命令ばかりか、病氣の性質そのものが、私にこの絶食を余儀なくさせるのである。だから病み始めより回復期に向つた時の方が、余計瘦やせこけてふらふらする。一カ月以上かかるのもおもにこの衰弱たが祟たるからのように思われる。

私の立居たちいが自由になると、黒くろ粹わくのついた摺すり物ものが、時々私の机の上に載せられる。私は運命を苦笑する人のごとく、絹シルク帽ハットなどを被かぶつて、葬式さうしきの供ともに立つ、俵くるまを驅かつて齋さい場やうへ駈かけつける。死んだ人のうちには、御爺おやじさんも御婆おばあさんもあるが、時には私よりも年齒としが若くつて、平生からその健康を誇つていた人も交まじつている。

私は宅へ歸つて机の前に坐つて、人間の寿命は実に不思議なものだと考える。多病な私

はなぜ生き残っているのだろうかと思つて見る。あの人はどういう訳で私より先に死んだのだろうかと思う。

私としてこういう黙想に耽るのはむしろ当然だといわなければならぬ。けれども自分の位地や、身体や、才能や——すべて己れというもののおり所を忘れがちな人間の一人として、私は死なないのが当り前だと思ひながら暮らしている場合が多い。読経の間ですら、焼香の際ですら、死んだ仏のあとに生き残つた、この私という形骸を、ちつとも不思議と心得ずに澄ましている事が常である。

或人が私に告げて、「他の死ぬのは当り前のように見えますが、自分が死ぬという事だけはとても考えられません」と云つた事がある。戦争に出た経験のある男に、「そんな隊のものが続々斃れるのを見ていながら、自分だけは死なないと思つていられますか」と聞いたなら、その人は「いられますね。おおかた死ぬまでは死なないと思つてるんでしょう」と答えた。それから大学の理科に關係のある人に、飛行機の話をお聞きされた時に、こんな問答をした覚えもある。

「ああして始終落ちたり死んだりしたら、後から乗るものは怖いだろうね。今度はおれの番だという氣になりそうなものだが、そうでないかしら」

「ところがそうでないと見えます」

「なぜ」

「なぜって、まるで反対の心理状態に支配されるようになるらしいのです。ヤッぱりあいつは墜落して死んだが、おれは大丈夫だという気になると見えますね」

私も恐らくこういう人の気分で、比較的平気にしていられるのだろう。それもそのはずである。死ぬまでは誰しも生きているのだから。

不思議な事に私の寝ている間には、黒^{くろ}杵^{わく}の通知がほとんど来ない。去年の秋にも病気が癒^{なお}った後^{あと}で、三四人の葬儀に列したのである。その三四人の中に社の佐藤君も這^{はい}入^いっていた。私は佐藤君がある宴会の席で、社から貰^{もら}った銀^{ぎん}盃^{ばい}を持って来て、私に酒を勧^{すす}めてくれた事を思い出した。その時彼の踊^{おど}った変な踊もまだ覚えていて。この元気な嘔^{くつき}強^{きやう}な人の葬^{とむら}式^{しき}に行^いった私は、彼が死んで私が生残^{せいざん}っているのを、別段の不思議とも思わずにいる時の方が多い。しかし折々考えると、自分の生きている方が不自然のような心持にもなる。そうして運命がわざと私を愚弄^{ぐろう}するのではないかしらと疑いたくなる。

今私の住んでいる近所に喜久井町きくいちょうという町がある。これは私の生れた所だから、ほかの人よりもよく知っている。けれども私が家を出て、方々漂ひょうろう浪なみして帰って来た時には、その喜久井町がだいぶ広がって、いつの間にか根来ねらいの方まで延びていた。

私に縁故の深いこの町の名は、あまり聞き慣れて育ったせいとか、ちつとも私の過去を誘い出す懐なつかしい響を私に与えてくれない。しかし書齋ひとに独り坐まって、頬杖ほおづえを突いたまま、流れを下る舟のように、心を自由に遊ばせておくと、時々私の聯想れんそうが、喜久井町の四字にぱたりと出会ったなり、そこでしばらくていかい徊わし始める事がある。

この町は江戸と云った昔には、多分存在していなかったものらしい。江戸が東京に改まった時か、それともずっと後のちになつてからか、年代はたしかに分らないが、何でも私の父が拵こしらえたものに相違ないのである。

私の家の定紋じょうもんが井桁いげたに菊なので、それにちなんだ菊に井戸を使って、喜久井町としたという話は、父自身の口から聴いたのか、または他のものから教おすわつたのか、何しろ今でもまだ私の耳に残っている。父は名主なぬしがなくなつてから、一時区長という役を勤めていたので、あるいはそんな自由も利きいたかも知れないが、それを誇ほこりにした彼の虚栄心を、今

になつて考えて見ると、厭いやな心持は疾とくに消え去つて、ただ微笑したくなるだけである。

父はまだその上に自宅の前から南へ行く時には是非共登らなければならぬ長い坂に、自分の姓の夏目という名をつけた。不幸にしてこれは喜久井町ほど有名にならずに、ただの坂として残つてゐる。しかしこの間、或人が来て、地図でこの辺の名前を調べたら、夏目坂というのがあつたと云つて話したから、ことによると父の付けた名が今でも役に立っているのかも知れない。

私が早稲田わせだに歸つて来たのは、東京を出てから何年ぶりになるだろう。私は今の住居すまいに移る前、家うちを探す目的であつたか、また遠足の帰り路であつたか、久しぶりで偶然私の旧家の横へ出た。その時表から二階の古ふる瓦がわらが少し見えたので、まだ生き残つてゐるのかしらと思つたなり、私はそのまま通り過ぎてしまつた。

早稲田に移つてから、私はまたその門前を通つて見た。表から覗のぞくと、何だかもとと變らないような氣もしたが、門には思いも寄らない下宿屋の看板かかが懸かつていた。私は昔の早稲田たんぼ田圃ぼが見たかつた。しかしそこはもう町になつていた。私は根来ねいろの茶ちや臼ばたけと竹たけ藪やぶを一目眺ひとめめたかつた。しかしその痕こんせき迹はどこにも発見する事ができなかつた。多分この辺だろうと推測した私の見当けんとうは、當つてゐるのか、外はずれてゐるのか、それさえ不明であ

った。

私は茫然として佇立した。なぜ私の家だけが過去の残骸のごとくに存在しているのだろう。私は心のうちで、早くそれが崩れてしまえば好いのにと思った。

「時」は力であった。去年私が高田の方へ散歩したついでに、何気なくそこを通り過ぎると、私の家は綺麗に取り壊されて、そのあとに新らしい下宿屋が建てられつつあった。その傍には質屋もできていた。質屋の前に疎らな囲をして、その中に庭木が少し植えてあった。三本の松は、見る影もなく枝を刈り込まれて、ほとんど畸形児のようになっていたが、どこか見覚えのあるような心持を私に起させた。昔し「影参差松三本の月夜かな」と詠ったのは、あるいはこの松の事ではなかったろうかと考えつつ、私はまた家に帰った。

二十四

「そんな所に生い立って、よく今日まで無事にすんだものですね」

「まあどうかこうか無事にやって来ました」

私達の使った無事という言葉は、男女の間に起る恋の波瀾がないという意味で、云わ

ば情事の反対を指したようなものであるが、私の追窮心は簡単なこの一句の答で満足できなかった。

「よく人が云いますね、菓子屋へ奉公すると、いくら甘いものの好きな男でも、菓子が厭になるって、御彼岸に御萩などを拵えているところを宅で見ても分るじゃありませんか、拵えるものは、ただ御萩を御重に詰めるだけで、もうげんなりした顔をしているくらいだから。あなたの場合もそんな訳なんですか」

「そういう訳でもないようです。とにかく廿歳少し過ぎまでは平気でいたのですから」
その人はある意味において好男子であった。

「たといあなたが平気でいても、相手が平気でいない場合がないとも限らないじゃありませんか。そんな時には、どうしたって誘われがちになるのが当り前でしょう」

「今からふり返つて見ると、なるほどこういう意味でああいう事をしたのだとか、あんな事を云つたのだとか、いろいろ思い当る事がないでもありません」

「じゃ全く気がつかずにいたのですね」

「まあそうです。それからこちらで気のついたのも一つありました。しかし私の心はどうしても、その相手に惹きつけられる事ができなかったのです」

私はそれが話の終りかと思つた。二人の前には正月の膳ぜんが据すえてあつた。客は少しも酒を飲まないし、私もほとんど盃さかずきに手を触れなかつたから、献けん酬しゆうというものは全くなかつた。

「それだけで今日まで経過して来られたのですか」と私は吸物をすすりながら念のために訊きいて見た。すると客は突然こんな話を私にして聞かせた。

「まだ使用人であつた頃に、ある女と二年ばかり会つていた事があります。相手は無し論ろ素そ人にんではないのでした。しかしその女はもういないのです。首を縊くつて死んでしまつたのです。年は十九でした。十日ばかり会わないうちに死んでしまつたのです。その女にはね、旦那だんなが二人あつて、双方が意地いぢづくで、身受の金を競せり上あげにかかつたのです。それに双方共老妓を味方にして、こつちへ来い、あつちへ行くなど義理責ぎりせめにもしたらしいのです。……」

「あなたはそれを救つてやる訳に行かなかつたのですか」

「当時の私は丁稚ていぢの少し毛はの生はえたようなもので、とてもどうもできないのです」

「しかしその芸妓げいしやはあなたのために死んだのじゃありませんか」

「さあ……。一度に双方の旦那に義理を立てる訳に行かなかつたからかも知れませんが。」

……しかし私ら二人の間に、どこへも行かないという約束はあったに違ないのです」

「するとあなたが間接にその女を殺した事になるのかも知れませんか」

「あるいはそうかも知れません」

「あなたは寢覚ねぞめが悪かありませんか」

「どうも好くないのです」

元日に込み合こつた私の座敷は、二日になつて淋さびしいくらい静かであつた。私はその淋しい春の松の内に、こういう憐あわれな物語りを、その年賀の客から聞いたのである。客は真面まじ目な正直な人だつたから、それを話すにも、ほとんど艶つやつぽい言葉を使わなかつた。

二十五

私がまだ千駄木にいた頃の話だから、年数にすると、もうだいぶ古い事になる。

或日私は切通きりとおしの方へ散歩した帰りに、本郷四丁目の角へ出る代りに、もう一つ手前の細い通りを北へ曲つた。その曲り角にはその頃あつた牛屋ぎゅうやの傍そばに、寄席よせの看板がいつでも懸かつていた。

雨の降る日だったので、私は無論傘をさしていた。それが鉄御納戸の八間の深張で、上から洩つてくる雫が、自然木の柄を伝わって、私の手を濡らし始めた。人通りの少ないこの小路は、すべての泥を雨で洗い流したように、足駄の齒に引つ懸る汚ないものはほとんどなかった。それでも上を見れば暗く、下を見れば佗びしかった。始終通りつけているせいでもあろうが、私の周囲には何一つ私の眼を惹くものは見えなかった。そうして私の心はよくこの天気とこの周囲に似ていた。私には私の心を腐蝕するような不愉快な塊が常にあつた。私は陰鬱な顔をしながら、ぼんやり雨の降る中を歩いていった。

ひかげちよう
日蔭町の寄席の前まで来た私は、突然一台の幌俵に出合った。私と俵の間には何へだたの隔りもなかったので、私は遠くからその中に乗っている人の女だという事に気がついた。まだセルロイドの窓などのできない時分だから、車上の人は遠くからその白い顔を私に見せていたのである。

私の眼にはその白い顔が大変美しく映った。私は雨の中を歩きながらじつとその人の姿に見惚れていた。同時にこれは芸者だろうという推察が、ほとんど事実のように、私の心に働らきかけた。すると俵が私の一間ばかり前へ来た時、突然私の見ていた美しい人が、鄭寧な会釈を私にして通り過ぎた。私は微笑に伴なうその挨拶とともに、相手が、

大塚楠緒さんであつた事に、始めて気がついた。

次に会つたのはそれから幾日目だつたらうか、楠緒さんが私に、「この間は失礼しました」と云つたので、私は私のありのままを話す氣になつた。

「実はどこの美くしい方かと思つて見ていました。芸者じゃないかしらとも考えたのです」
 その時楠緒さんが何と答えたか、私はたしかに覚えていないけれども、楠緒さんはちつとも顔を赧らめなかつた。それから不愉快な表情も見せなかつた。私の言葉をただそのままに受け取つたらしく思われた。

それからずっと経つて、ある日楠緒さんがわざわざ早稲田へ訪ねて来てくれた事がある。しかるにあいにく私は妻と喧嘩をしていた。私は厭な顔をしたまま、書齋にじつと坐つていた。楠緒さんは妻と十分ばかり話をして歸つて行つた。

その日はそれですんだが、ほどなく私は西片町へ詫まりに出かけた。

「実は喧嘩をしていたので。妻も定めて無愛想でしたらう。私はまた苦々しい顔を見せるのも失礼だと思つて、わざと引込んでいたのです」

これに対する楠緒さんの挨拶も、今では遠い過去になつて、もう呼び出す事のできな
 いほど、記憶の底に沈んでしまつた。

楠緒さんが死んだという報知の来たのは、たしか私が胃腸病院にいる頃であつた。死去の広告中に、私の名前を使つて差支ないかと電話で問い合された事などもまだ覚えてゐる。私は病院で「ある程の菊投げ入れよ棺の中」という手向の句を楠緒さんのために咏んだ。それを俳句の好きなる男が嬉しがつて、わざわざ私に頼んで、短冊に書かせて持つて行つたのも、もう昔になつてしまつた。

二十六

益さんがどうしてそんなに零落たものか私には解らない。何しろ私の知っている益さんは郵便脚夫であつた。益さんの弟の庄さんも、家を潰して私の所へ転がり込んで食客になつていたが、これはまだ益さんよりは社会的地位が高かつた。小供の時分本町の鯛屋へ奉公に行つていた時、浜の西洋人が可愛がつて、外国へ連れて行くと云つたのを断つたのが、今考えると残念だなどと始終話していた。

二人とも私の母方の従兄に当る男だつたから、その縁故で、益さんは弟に会うため、また私の父に敬意を表するため、月に一遍ぐらいは、牛込の奥まで煎餅の袋などを手土産

に持つて、よく訪ねて来た。

益さんはその時何でも芝の外れか、または品川近くに世帯を持つて、一人暮しの呑気な生活を営んでいたらしいので、宅へ来るとよく泊まつて行つた。たまに帰ろうとすると、兄達が寄つてたかつて、「帰ると承知しないぞ」などと威嚇したものである。

当時二番目と三番目の兄は、まだ南校へ通つていた。南校というのは今の高等商業学校の位置にあつて、そこを卒業すると、開成学校すなわち今日の大学へ這入る組織になつていたものらしかった。彼らは夜になると、玄関に桐の机を並べて、明日の下読をする。下読と云つたところで、今の書生のやるのとはだいぶ違つていた。グードリツチの英国史といつたような本を、一節ぐらいつつ読んで、それからそれを机の上へ伏せて、口の内あしで今読んだ通りを暗誦するのである。

その下読が済むと、だんだん益さんが必要になつて来る。庄さんもいつの間にかそこへ顔を出す。一番目の兄も、機嫌の好い時は、わざわざ奥から玄関まで出張つて来る。そうしてみんないつしよになつて、益さんに調戯い始める。

「益さん、西洋人の所へ手紙を配達する事もあるだろう」

「そりや商売だから厭だつて仕方がありません、持つて行きますよ」

「益さんは英語ができるのかね」

「英語ができるくらいならこんな真似まねをしちゃいけません」

「しかし郵便ツとか何とか大きな声を出さなくつちやならないだろう」

「そりや日本語で間に合いますよ。異人だつて、近頃は日本語が解りますもの」

「へええ、向むこうでも何とか云うのかね」

「云いますとも。ペロリの奥さんなんか、あなたよろしいありがたいと、ちやんと日本語で挨拶あいさつをするくらいです」

みんなは益さんをここまでおびき出しておいて、どつと笑うのである。それからまた

「益さん何て云うんだつて、その奥さんは」と何遍も一つ事を訊きいては、いつまでも笑いの種にしようと巧たくらんでかかる。益さんもしまいには苦笑いをして、とうとう「あなたよろしい」をやめにしてしまう。すると今度は「じゃ益さん、野中のなかの一本杉いっほんすぎをやつて御覽よ」と誰かが云い出す。

「やれつたつて、そうおいそれとやれるもんじやありません」

「まあ好いから、おやりよ。いよいよ野中の一本杉の所まで参りますと……」

益さんはそれでもやにやして応じない。私はとうとう益さんの野中の一本杉というも

のを聴かずにしまった。今考えると、それは何でも講釈か人情噺の一節じゃないかしらと思う。

私の成人する頃には益さんもう宅へ来なくなつた。おおかた死んだのだろう。生きていれば何か消息のあるはずである。しかし死んだにしても、いつ死んだのか私は知らない。

二十七

私は芝居というものに余り親しみが無い。ことに旧劇は解らない。これは古来からその方面で発達して来た演芸上の約束を知らないの、舞台の上に開展される特別の世界に、同化する能力が私に欠けているためだとも思う。しかしそればかりではない。私が旧劇を見て、最も異様に感ずるのは、役者が自然と不自然の間を、どっちつかずにぶらぶら歩いている事である。それが私に、中腰と云つたような落ちつけない心持を引き起させるのも恐らく理の当然なのだろう。

しかし舞台の上に子供などが出て来て、甲の高い声で、憐れっぽい事などを云う時には、いかな私でも知らず知らず眼に涙が滲み出る。そうしてすぐ、ああ騙されたなど後悔する。

なぜあんなに安っぽい涙を零したのだろうと思う。

「どう考えても騙されて泣くのは厭だ」と私はある人に告げた。芝居好のその相手は、「それが先生の常態なのでしよう。平生涙を控え目ひかめにしているのは、かえってあなたあなたのよそゆきじゃありませんか」と注意した。

私はその説に不服だったので、いろいろの方面から向むこうを納得させようとしているうちに、話題がいつか絵画の方に滑すべって行つた。その男はこの間参考品として美術協会に出た若じゃく沖ちゆうの御物ぎよぶつを大変に嬉うれしがって、その評論をどこかの雑誌に載せるとかいう噂うわさであつた。私はまたあの鶏の図がすこぶる気に入らなかつたので、ここでも芝居と同じような議論が二人の間に起つた。

「いつたい君に画えを論ずる資格はないはずだ」と私はついに彼を罵倒ばとうした。するとこの一言いちごんが本もとになつて、彼は芸術一元論を主張し出した。彼の主意をかいつまんで云うと、すべての芸術は同じ源みなもとから湧わいて出るのだから、その内の一つさえうんと腹に入れておけば、他おのは自ずから解し得られる理窟りくつだといふのである。座にいる人のうちで、彼に同意するものも少なくなかつた。

「じゃ小説を作れば、自然柔道も旨うまくなるかい」と私が笑談じょうだん半分はんぶんに云つた。

「柔道は芸術じやありませんよ」と相手も笑いながら答えた。

芸術は平等観から出立するのではない。よしそこから出立するにしても、差別観さべつかんに入つて始めて、花が咲くのだから、それを本来の昔へ返せば、絵も彫刻も文章も、すっかり無に帰してしまふ。そこに何で共通のものがあるう。たとい有つたにしたらところで、實際の役には立たない。彼我共通の具体的なものなどの発見もできるはずがない。

こういうのがその時の私の論旨ろんしであつた。そうしてその論旨はけつして充分なものではなかつた。もつと先方の主張を取り入れて、周到的解釈くたを下してやる余地はいくらでもあつたのである。

しかしその時座にいた一人いちにんが、突然私の議論を引き受けて相手に向い出したので、私も面倒だからついそのままにしておいた。けれども私の代りになつたその男というのはだいぶ酔つていた。それで芸術がどうだの、文芸がどうだのと、しきりに弁ずるけれども、あまり要領を得た事は云わなかつた。言葉遣づかいさえ少しへべれけであつた。初めのうちは面白がつて笑つていた人達も、ついには黙つてしまつた。

「じゃ絶交しよう」などと酔つた男がしまいに云い出した。私は「絶交するなら外でやつてくれ、ここでは迷惑だから」と注意した。

「じゃ外へ出て絶交しようか」と酔った男が相手に相談を持ちかけたが、相手が動かないので、とうとうそれぎりになってしまった。

これは今年の元日の出来事である。酔った男はそれからちよいちよい来るが、その時の喧嘩けんかについては一口も云わない。

二十八

ある人が私の家の猫うちを見て、「これは何代目の猫ですか」と訊きいた時、私は何気なく「二代目です」と答えたが、あとで考えると、二代目はもう通り越して、その実じつ三代目になつていた。

初代は宿なしであったにかかわらず、ある意味からして、だいぶ有名になったが、それに引きかえて、二代目の生しょうがい涯がいは、主人にさえ忘れられるくらい、短命だった。私は誰がそれをどこから貰つて来たかよく知らない。しかし手の掌ひらに載せれば載せられるような小さい恰かつこう好こうをして、彼がそこいら中じゅう這はい廻まわっていた当時を、私はまだ記憶している。この可憐な動物は、ある朝家のものが床を揚あげる時、誤つて上から踏ふみ殺してしまった。ぐ

うという声がしたので、蒲団ふとんの下に潜り込んでいる彼をすぐ引き出して、相当の手当てあてをしたが、もう間に合わなかった。彼はそれから一日二日してついに死んでしまった。その後へ来たのがすなわち真黒な今の猫である。

私はこの黒猫を可愛かわいがっても憎にくがってもいない。猫の方でも宅うちじゆう中のそのそ歩き廻るだけで、別に私の傍そばへ寄りつこうという好意を現わした事がない。

ある時彼は台所の戸棚とだなへ這入って、鍋なべの中へ落ちた。その鍋の中には胡麻ごまの油がいつぱいあったので、彼の身体からだはコスメチックでも塗りつけたように光り始めた。彼はその光る身体で私の原稿紙の上に寝たものだから、油がずっと下まで滲しみ通とおって私をずいぶんな目に逢あわせた。

去年私の病気をする少し前に、彼は突然皮膚病に罹かかった。顔から額へかけて、毛がだんだん抜けて来る。それをしきりに爪で搔かくものだから、瘡かさ蓋ふたがぼろぼろ落ちて、痕あとが赤あ裸はだかになる。私はある日食事中この見苦しい様子を眺めて厭いやな顔をした。

「ああ瘡蓋かさふたを零こぼして、もし小供にでも伝染するといけないから、病院へ連れて行って早く療治りょうぢをしてやるがいい」

私は家のものうちものにこういつたが、腹の中では、ことによると病気が病気だから全治しまい

とも思つた。昔し私の知つている西洋人が、ある伯爵から好い犬を貰つて可愛がつていたところ、いつかこんな皮膚病に悩まされ出したので、気の毒だからと云つて、医者に頼んで殺して貰つた事を、私はよく覚えていたのである。

「クロロフォームか何かで殺してやった方が、かえつて苦痛がなくなつて仕合せだろう」

私は三四度同じ言葉を繰り返して見たが、猫がまだ私の思う通りにならないうちに、自分の方が病気でどつと寝てしまった。その間私はついに彼を見る機会をもたなかつた。自分の苦痛が直接自分を支配するせいか、彼の病氣を考ふる余裕さえ出なかつた。

十月に入つて、私はようやく起きた。そうして例のごとく黒い彼を見た。すると不思議な事に、彼の醜い赤裸の皮膚にもそのような黒い毛が生えかかつていた。

「おや癒るのかしら」

私は退屈な病後の眼を絶えず彼の上に注いでいた。すると私の衰弱がだんだん回復するにつれて、彼の毛もだんだん濃くなつて来た。それが平生の通りになると、今度は以前より肥え始めた。

私は自分の病氣の経過と彼の病氣の経過とを比較して見て、時々そこに何かの因縁があるような暗示を受ける。そうしてすぐその後から馬鹿らしいと思つて微笑する。猫の方

ではただにやにや鳴くばかりだから、どんな心持でいるのか私にはまるで解らない。

二十九

私は両親の晩年になってできたいわゆる末^{すえ}子^こである。私を生んだ時、母はこんな年^{とし}齒^はをして懐妊するのは面目ないと云ったとかいう話が、今でも折々は繰^くり返^{かえ}されている。

単にそのためばかりでもあるまいが、私の両親は私が生れ落ちると間もなく、私を里にやってしまった。その里というのは、無論私の記憶に残っているはずがないけれども、成人^{のち}の後聞いて見ると、何でも古道具の売買を渡^{とせ}世^{せい}にしていた貧しい夫婦ものであつたらしい。

私はその道具屋の我^が楽^{らく}多^たといつしよに、小さい筈^{ざる}の中に入れられて、毎晩四谷^{よつや}の大通りの夜店に曝^{さら}されていたのである。それをある晩私の姉が何かのついでにそこを通りかかった時見つけて、可^か哀^{あい}想^{そう}とでも思つたのだろう、懐^{ふとこ}へ入れて宅^{うち}へ連れて来たが、私はその夜どうしても寝つかずに、とうとう一晩中泣き続けに泣いたとかいうので、姉は大いに父から叱^{しか}られたそうである。

私はいつ頃いつごろその里から取り戻されたか知らない。しかしじきまたある家へ養子にやられた。それはたしか私の四つの歳であったように思う。私は物心のつく八九歳までそこで成長したが、やがて養家に妙なごたごたが起つたため、再び実家へ戻るような仕儀となった。浅草から牛込へ遷うつされた私は、生れた家うちへ帰つたとは気がつかずに、自分の両親をもと通り祖父母とのみ思っていた。そうして相変らず彼らを御爺おじいさん、御婆おばあさんと呼んで毫ごうも怪しまなかつた。向むこうでも急に今までの習慣を改めるのが変だと考えたものか、私にそう呼ばれながら澄すました顔かほをしていた。

私は普通の末すえ子このようにけつして両親から可愛かわいがられなかつた。これは私の性質せいしつが素す直なおでなかつたためだの、久しく両親に遠とほざかつていたためだの、いろいろの原因から来ていた。とくに父からはむしろ苛酷かこくに取扱とかわれたという記憶きおくがまだ私の頭に残のこっている。それだのに浅草から牛込へ移うつされた当時の私は、なぜか非常に嬉うれしかった。そうしてその嬉うれしさが誰の目にもつくくらいに著あるしく外へ現あらわれた。

馬鹿な私は、本当の両親を爺じいばあ婆ばあとのみ思い込んで、どのくらいの日ひ日を空くうに暮くらしたものでらう、それを訊きかれるとまるで分らないが、何でも或夜あるよこんな事があつた。

私がひとり座敷ざしきに寝ねていると、枕元まくらもとの所で小さな声を出して、しきりに私の名を呼ぶも

のがある。私は驚ろいて眼を覚さましたが、周囲あたりが真暗まっくらなので、誰がそこに蹲踞うずくまっているのか、ちよつと判断がつかなかった。けれども私は小供だからただじつとして先方の云う事だけを聞いていた。すると聞いているうちに、それが私の家の下女うぢの声である事に気がついた。下女は暗い中で私に耳語みみごすりをするようにこういのである。――

「あなたが御爺さん御婆さんだと思つていらつしやる方は、本当はあなたの御父おとつさんと御母おさんなのですよ。先刻さつきね、おおかたそのせいであんなにこつちの宅うちが好なんだろう、妙なものだな、と云つて二人で話していらつしたのを私が聞いたから、そつとあなたに教えて上げるんですよ。誰にも話しちゃいけませんよ。よござんすか」

私はその時ただ「誰にも云わないよ」と云つたぎりだったが、心の中うちでは大変嬉しかつた。そうしてその嬉しさは事実を教えてくれたからの嬉しさではなくって、単に下女が私に親切だったからの嬉しさであつた。不思議にも私はそれほど嬉しく思った下女の名も顔もまるで忘れてしまった。覚えているのはただその人の親切だけである。

私がこうして書齋に坐すわっていると、来る人の多くが「もう御病気はすっかり御癒おなりですか」と尋ねてくれる。私は何度も同じ質問を受けながら、何度も返答に躊躇ちゆうちよした。そうしてその極きよくいつでも同じ言葉を繰り返く返かえすようになった。それは「ええまあどうかこうか生きています」という変な挨拶あいさつに異ことならなかった。

どうかこうか生きている。——私はこの一句を久しい間使用した。しかし使用することに、何だか不穩ふおんとう当な心持がするので、自分でも実はやめられるならばと思つて考えてみたが、私の健康状態を云い現わすべき適當な言葉は、他たにどうしても見つからなかつた。

ある日T君が来たから、この話をして、癒なつたとも云えず、癒らないとも云えず、何と答えて好いか分らないと語つたら、T君はすぐ私にこんな返事をした。

「そりや癒つたとは云われませんね。そう時々再発するようじゃ。まあもとの病気の継続なんでしょう」

この継続という言葉聞いた時、私は好い事を教えられたような気がした。それから以後は、「どうかこうか生きています」という挨拶あいさつをやめて、「病気はまだ継続中です」と改めた。そうしてその継続の意味を説明する場合には、必ず歐洲の大乱ひきあいを引合に出した。

「私はちようど独乙ドイツが聯合軍れんごうぐんと戦争をしているように、病氣と戦争をしているのです。今こうやってあなたと対坐していられるのは、天下が太平になったからではないので、塙んごうの中に這入はいつて、病氣と睨めにらつくらをしてているからです。私の身体からだは乱世です。いっどんな変へんが起らないとも限りません」

或人は私の説明を聞いて、面白そうにははと笑った。或人は黙っていた。また或人は氣の毒らしい顔をした。

客の歸つたあとで私はまた考えた。——継続中のものはおそらく私の病氣ばかりではないだろう。私の説明を聞いて、笑談しょうだんだと思つて笑う人、解らないで黙っている人、同情の念に驅かられて氣の毒らしい顔をする人、——すべてこれらの人の心の奥には、私の知らない、また自分達さえ氣のつかない、継続中のものがいくらでも潜ひそんでいるのではなからうか。もし彼らの胸に響くような大きな音で、それが一度に破裂したら、彼らははたしてどう思うだろう。彼らの記憶はその時もはや彼らに向つて何物をも語らないだろう。過去の自覚はとくに消えてしまっているだろう。今と昔とまたその昔の間に何らの因果を認める事のできない彼らは、そういう結果おちいに陥つた時、何と自分を解釈して見る氣だろう。所詮しよせん我々は自分で夢の間に製造ました爆裂弾を、思い思いに抱いだきながら、一人残らず、死

という遠い所へ、談笑しつつ歩いて行くのではなからうか。ただどんなものを抱だいているのか、他ひとも知らず自分も知らないの、仕合せなんだろう。

私は私の病気が継続であるという事に気がついた時、歐洲の戦争もおそらくいつの世からかの継続だろうと考えた。けれども、それがどこからどう始まって、どう曲折して行くかの問題になると全く無知識なので、継続という言葉を解しない一般の人を、私はかえって羨うらやましく思っている。

三十一

私がまだ小学校に行っていた時分に、喜きいちゃんという仲の好い友達があつた。喜きいちゃんは当時中な町ちやうの叔父さんの宅うちにいたので、そう道程みちのりの近くない私の所からは、毎日会いに行く事が出来い悪くかつた。私はおもに自分の方から出かけないで、喜きいちゃんの来るのを宅で待つていた。喜きいちゃんはいくら私が行かないでも、きつと向うから来るにきまつていた。そうしてその来る所は、私の家の長屋を借りて、紙や筆を売る松もとさんの許もとであつた。

喜いちちゃんには父母ちちははがないようだったが、小供の私には、それがいつこう不思議とも思われなかった。おそらく訊きいて見た事もなかったろう。したがって喜いちちゃんがなぜ松さんの所へ来るのか、その訳さえも知らずにいた。これはずっと後で聞いた話であるが、この喜いちちゃんの御父おとつさんというのは、昔むかし銀座の役人か何かをしていた時、贖にせがね金を造つたとかいう嫌疑けんぎを受けて、入じゆうろう牢ろうしたまま死んでしまったのだという。それであとに取り残された細君が、喜いちちゃんを先夫せんぶの家へ置いたなり、松さんの所へ再縁したのだから、喜いちちゃんが時々つみ生の母に会いに来るのは当り前の話であった。

何にも知らない私は、この事情を聞いた時ですら、別段変な感じも起きなかつたくらいだから、喜いちちゃんとふざけまわって遊ぶ頃に、彼の境遇などを考えた事はただの一度もなかつた。

喜いちちゃんも私も漢学が好きだったので、解りもしない癖くせに、よく文章の議論などをして面白がつた。彼はどこから聴いてくるのか、調べてくるのか、よくむずかしい漢籍の名前などを挙あげて、私を驚ろかす事が多かつた。

彼はある日私の部屋同様になつてゐる玄関ふとこに上り込んで、懐ふとこから二冊つづきの書物を出して見せた。それは確たしかに写本であつた。しかも漢文で綴つづつてあつたように思う。私は喜い

ちゃんから、その書物を受け取って、無意味にそこを引つ繰返して見ていた。実は何が何だか私にはさっぱり解らなかつたのである。しかし喜いちちゃんは、それを知ってるかなどと露骨な事をいう性質ではなかつた。

「これは太田南畝おわたなんぼの自筆なんだがね。僕の友達がそれを売りたいというので君に見せに来たんだが、買ってやらないか」

私は太田南畝という人を知らなかつた。

「太田南畝っていったい何だい」

「蜀山人しよくさんじんの事さ。有名な蜀山人さ」

無学な私は蜀山人という名前さえまだ知らなかつた。しかし喜いちちゃんにそう云われて見ると、何だか貴重きんじゆうの書物らしい気がした。

「いくらなら売るのがかい」と訊いて見た。

「五十銭に売りたいと云うんだがね。どうだろう」

私は考えた。そうして何しろ価値切つて見るのが上策だと思いついた。

「二十五銭なら買つても好い」

「それじゃ二十五銭でも構わないから、買ってやりたまえ」

喜いちちゃんはこう云いつつ私から二十五銭受取っておいて、またしきりにその本の効能を述べ立てた。私には無論その書物が解らないのだから、それほど嬉うれしくもなかつたけれども、何しろ損はしないだろうというだけの満足はあつた。私はその夜南畝なんぼし莠言ゆうげん——たしかそんな名前だと記憶しているが、それを机の上に載せて寝た。

三十二

翌日あくるひになると、喜いちちゃんがまたぶらりとやって来た。

「君昨日きのう買つて貰つた本の事だがね」

喜いちちゃんはそれだけ云つて、私の顔を見ながらぐずぐずしている。私は机の上に載せてあつた書物に眼を注いだ。

「あの本かい。あの本がどうかしたのかい」

「実はあすこの宅うちの阿爺おやじに知れたものだから、阿爺が大変怒つてね。どうか返して貰つて来てくれつて僕に頼むんだよ。僕も一遍君に渡したもんだから厭いやだったけれども仕方がないからまた来たのさ」

「本を取りにかい」

「取りにつて訳でもないけれども、もし君の方で差支がないなら、返してやってくれないか。何しろ二十五銭じゃ安過ぎるっていうんだから」

この最後の一言で、私は今まで安く買い得たという満足の裏に、ぼんやり潜んでいた不快、——不善の行為から起る不快——を判然自覚し始めた。そうして一方では狡猾い私を怒ると共に、一方では二十五銭で売った先方を怒った。どうしてこの二つの怒りを同時に和らげたものだろう。私は苦い顔をしてしばらく黙っていた。

私のこの心理状態は、今の私が小供の時の自分を回顧して解剖するのだから、比較的明瞭に描き出されるようなものの、その場合の私にはほとんど解らなかつた。私さえだ苦い顔をしたという結果だけしか自覚し得なかつたのだから、相手の喜いちちゃんには無論それ以上解るはずがなかつた。括弧の中でいふべき事も知れないが、年齢を取った今日でも、私にはよくこんな現象が起ってくる。それでよく他から誤解される。

喜いちちゃんは私の顔を見て、「二十五銭では本当に安過ぎるんだとき」と云つた。

私はいきなり机の上に載せておいた書物を取つて、喜いちちゃんの前に突き出した。

「じゃ返そう」

「どうも失敬した。何しろ安公やすこうの持つてるものでないんだから仕方がない。阿爺おやしの宅うちに昔からあったやつを、そつと売つて小遣こづかいにしようつて云うんだからね」

私はぷりぷりして何とも答えなかつた。喜いちやんは袂ふとこから二十五銭出して私の前へ置きかけたが、私はそれに手を触れようともしなかつた。

「その金なら取らないよ」

「なぜ」

「なぜでも取らない」

「そうか。しかしつまらないじゃないか、ただ本だけ返すのは。本を返すくらいなら二十五銭も取りたまいな」

私はたまらなくなつた。

「本は僕のものだよ。いったん買った以上は僕のものにきまつてるじゃないか」

「そりやそうに違いない。違いないが向の宅むこううちでも困つてるんだから」

「だから返すと云つてるじゃないか。だけど僕は金を取る訳がないんだ」

「そんな解らない事を云わずに、まあ取っておきたまいな」

「僕はやるんだよ。僕の本だけでも、欲しければやろうというんだよ。やるんだから本だ

け持つてつたら好いじゃないか」

「そうかそんなら、そうしよう」

喜いちちゃんは、とうとう本だけ持つて帰った。そうして私は何の意味なしに二十五銭の小遣を取られてしまったのである。

三十三

世の中に住む人間の一人いちにんとして、私は全く孤立して生存する訳に行かない。自然他と交渉けあひの必要がどこからか起つてくる。時候の挨拶あいさつ、用談、それからもつと込み入った懸合けあひ——これらから脱却する事は、いかに枯淡な生活を送っている私にもむずかしいのである。

私は何でも他のひとという事を真まに受けて、すべて正面から彼らの言語動作を解釈すべきものだろうか。もし私が持つて生れたこの単純な性情に自己を託して顧みかえりないとすると、時々飛んでもない人から騙だまされる事があるだろう。その結果蔭かげで馬鹿にされたり、冷評ひやかされたりする。極端な場合には、自分の前でさえ忍ぶべからざる侮辱を受けないとも限らな

い。

それでは他はみな擦れ枯らしの嘘吐ばかりと思つて、始めから相手の言葉に耳も借さず、心も傾けず、或時はその裏面に潜んでいらいしい反対の意味だけを胸に収めて、それで賢い人だと自分を批評し、またそこに安住の地を見出し得るだろうか。そうすると私は人を誤解しないとも限らない。その上恐るべき過失を犯す覚悟を、初手から仮定して、かからなければならぬ。或時は必然の結果として、罪のない他を侮辱するくらいの厚顔を準備しておかなければ、事が困難になる。

もし私の態度をこの両面のどつちかに片づけようとする、私の心にまた一種の苦悶が起る。私は悪い人を信じたくない。それからまた善い人を少しでも傷けたくない。そうして私の前に現われて来る人は、ことごとく悪人でもなければ、またみんな善人とも思えない。すると私の態度も相手しだいでいろいろに変わって行かなければならぬのである。

この変化は誰にでも必要で、また誰でも実行している事だろうと思うが、それがはたして相手にびたりと合つて寸分間違のない微妙な特殊な線の上をあぶなげもなく歩いているだろうか。私の大いなる疑問は常にそこに蟠まっている。

私の僻を別にして、私は過去において、多くの人から馬鹿にされたという苦い記憶をも

っている。同時に、先方の云う事や為る事を、わざと平たく取らずに、暗にその人の品性に恥を搔かしたと同じような解釈をした経験もたくさんありはしまいかと思う。

他に対する私の態度はまず今までの私の経験から来る。それから前後の關係と四圍の状況から出る。最後に、曖昧な言葉ではあるが、私が天から授かった直覚が何分か働らく。そうして、相手に馬鹿にされたり、また相手を馬鹿にしたり、稀には相手に彼相当な待遇を与えたりしている。

しかし今までの経験というものは、広いようで、その実はなほだ狭い。ある社会の一部で、何度となく繰り返された経験を、他の一部分へ持つて行くと、まるで通用しない事が多い。前後の關係とか四圍の状況とか云ったところで、千差万別なのだから、その応用の区域が限られているばかりか、その実千差万別に思慮を廻らさなければ役に立たなくなる。しかもそれを廻らす時間も、材料も充分給与されていない場合が多い。

それで私はともすると事実あるのだから、またないのだから解らない、極めてあやふやな自分の直覚というものを主位に置いて、他を判断したくなる。そうして私の直覚がはたして当ったか当たらないか、要するに客觀的事実によって、それを確める機会をもたない事が多い。そこにまた私の疑いが始終靄のようにかかつて、私の心を苦しめている。

もし世の中に全知全能ぜんちぜんのうの神があるならば、私はその神の前に跪ひざまずいて、私に毫髪ごうはつの疑うたがひを挟はさむ余地もないほど明らかな直覺を与えて、私をこの苦悶くもんから解脱げだつせしめん事を祈る。でなければ、この不明な私の前に出て来るすべての人を、玲瓏れいろう透徹とうてつな正直ものに変化して、私とその人との魂がぴたりと合うような幸福を授けたまわん事を祈る。今の私は馬鹿ばかで人に騙だまされるか、あるいは疑い深くて人を容いれる事ができないか、この両方だけしかないような気がする。不安で、不透明で、不愉快ふげきに充みちている。もしそれが生しょう涯がいつづくとするならば、人間とはどんなに不幸なものだろう。

三十四

私が大学にいる頃教えたある文学士が来て、「先生はこの間高等工業で講演をなすったそうですね」というから、「ああやった」と答えると、その男が「何でも解らなかつたよですよ」と教えてくれた。

それまで自分の云った事について、その方面の掛念けねんをまるでもっていないなかつた私は、彼の言葉を聞くとひとしく、意外の感に打たれた。

「君はどうしてそんな事を知ってるの」

この疑問に対する彼の説明は簡単であった。親戚だか知人だか知らないが、何しろ彼に關係のある或家うちの青年が、その学校に通っていて、当日私の講演を聴いた結果を、何だか解らないという言葉で彼に告げたのである。

「いったいどんな事を講演なすったのですか」

私は席上で、彼のためにまたその講演の梗こうがいを繰くり返かえした。

「別にむずかしいとも思えない事だろう君。どうしてそれが解らないかしら」

「解らないでしょう。どうせ解りやしません」

私には断乎だんこたるこの返事がいかにも不思議に聞こえた。しかしそれよりもなお強く私の胸を打ったのは、止よせばよかったという後悔の念であった。自白すると、私はこの学校から何度となく講演を依頼されて、何度となく断つたのである。だからそれを最後に引き受けた時の私の腹には、どうかしてそこに集まる聴衆に、相当の利益を与えたいという希望があった。その希望が、「どうせ解りやしません」という簡単な彼の一言いちごんで、みごとに粉砕ふんさいされてしまつて見ると、私はわざわざ浅草まで行く必要がなかつたのだと、自分を考えない訳に行かなかつた。

これはもう一二年前の古い話であるが去年の秋またある学校で、どうしても講演をやらなければ義理が悪い事になって、ついにそこへ行った時、私はふと私を後悔させた前年を思い出した。それに私の論じたその時の題目が、若い聴衆の誤解を招きやすい内容を含んでいたの、私は演壇を下りる間際にこう云った。――

「多分誤解はないつもりですが、もし私の今御話したうちに、はつきり判然しないところがあるなら、どうぞ私宅まで来て下さい。できるだけあなたがたに御納得ごなつとくの行くように説明して上げるつもりですから」

私のこの言葉が、どんな風に反響をもたらすだろうかという予期は、当時の私にはほとんど無かつたように思う。しかしそれから四五日経たつて、三人の青年が私の書齋に這入はいつて来たのは事実である。そのうちの二人は電話で私の都合を聞き合せた。一人は鄭寧ていねいな手紙を書いて、面会の時間を拵こしらえてくれと注文して来た。

私は快こころよくそれらの青年に接した。そうして彼らの来意を確たかめた。一人の方は私の予想通り、私の講演についての筋道の質問であつたが、残る二人の方は、案外にも彼らの友人がその家庭に対して採とるべき方針についての疑義を私に訊きこうとした。したがってこれは私の講演を、どう実社会に応用して好いかという彼らの目前に逼せまつた問題を持つて来た

のである。

私はこれら三人のために、私の云うべき事を云い、説明すべき事を説明したつもりである。それが彼らにどれほどの利益を与えたか、結果からいうとこの私にも分らない。しかしそれだけにしたところで私には満足なのである。「あなたの講演は解らなかつたそうです」と云われた時よりも遥はるかに満足なのである。

「この稿が新聞に出た二三日あとで、私は高等工業の学生から四五通の手紙を受取つた。その人々はみんな私の講演を聴いたものばかりで、いずれも私がここで述べた失望を打ち消すような事実を、反証として書いて来てくれたのである。だからその手紙はみな好意に充みちていた。なぜ一学生の云つた事を、聴衆全体の意見として速断するかなどという詰問的のものは一つもなかつた。それで私はここに一言を附加して、私の不明を謝し、併あわせて私の誤解を正してくれた人々の親切をありがたく思むねう旨を公けにするのである。」

私は小供の時分よく日本橋の瀬戸物町せとものちやうにある伊勢本いせもとという寄席よせへ講釈を聴きに行った。今の三越の向側むこうがわにいつでも昼席の看板がかかっている、その角かどを曲ると、寄席はつい小半町行くか行かない右手にあつたのである。

この席は夜になると、色物いろものだけしかかけないので、私は昼よりほかに足を踏み込んだ事がなかつたけれども、席数からいうと一番多く通つた所かよのように思われる。当時私わたしのいた家は無論高田の馬場の下ではなかつた。しかしいくら地理の便が好かつたからと云つて、どうしてあんなに講釈を聴きに行く時間が私にあつたものか、今考えるとむしろ不思議なくらいである。

これも今からふり返つて遠い過去を眺めるせいでもあらうが、そこは寄席としてはむしろ上品な気分を客に起させるようにできていた。高座こうざの右側みぎわきには帳場格子ちやうばごうしのような仕切きりを二方に立て廻して、その中に定連じやうれんの席が設けてあつた。それから高座こうざの後うしろが縁えん側わきで、その先がまた庭になつていた。庭には梅の古木ななが斜ななめに井桁いげたの上に突き出たりして、窮屈な感じのしないほどの大空が、縁から仰あがられるくらいに余分の地面を取り込んでいた。その庭を東に受けて離れ座敷のような建物も見えた。

帳場格子のうちにいる連中は、時間が余つて使い切れない有福な人達なのだから、みんな

な相応な服装なりをして、時々吞氣のんきそうに袂たもとから毛拔けぬきなどを出して根氣よく鼻毛を抜いていた。そんな長閑のどかな日には、庭の梅の樹きうぐいすに鶯うぐいすが来て啼なくような氣持もした。

中入なかいりになると、菓子なかいりを箱入のまま茶を売る男が客の間へ配なって歩くのがこの席の習慣になつていた。箱は浅い長方形のもので、まず誰でも欲しいと思う人の手の届く所に一つと云つた風に都合よく置かれるのである。菓子なかいりの数は一箱に十ぐらいの割だつたかと思つが、それを食べたいだけ食べて、後からその代価を箱の中に入れるのが無言の規約になつていた。私はその頃この習慣を珍らしいもののように興おもしろがつて眺めていたが、今となつて見ると、こうした鷹揚おうようで吞氣のんきな氣分は、どこの人寄場ひとよせばへ行つても、もう味わう事ができまいと思うと、それがまた何となく懐なつかしい。

私はそんなおつとりと物寂ものさびた空氣の中で、古めかしい講釈というものをいろいろの人から聴いたのである。その中には、すところ、のんのん、ずいずい、などという妙な言葉を使う男もいた。これは田辺たなべ南竜なんりゆうと云つて、もとはどこかの下足番であつたとかいふ話である。そのすところ、のんのん、ずいずいははなはだ有名なものであつたが、その意味を理解するものは一人もなかつた。彼はただそれを軍勢の押し寄せる形容詞として用いていたらしいのである。

この南竜はとつくの昔に死んでしまった。そのほかのものもたいていは死んでしまった。その後の様子ごをまるで知らない私には、その時分私を喜ばせてくれた人のうちで生きているものがはたして何人あるのだから全く分らなかつた。

ところがいつか美音会の忘年会のあつた時、その番組を見たら、吉原のたいこもち 間の茶番だの何だのが列ならべて書いてあるうちに、私はたつた一人の当時の旧友を見出した。私は新富座へ行つて、その人を見た。またその声を聞いた。そうして彼の顔も咽喉のども昔とちつとも變つていないのに驚ろいた。彼の講釈も全く昔の通りであつた。進歩もしない代りに、退歩もしていなかつた。廿世紀のこの急劇な變化を、自分と自分の周囲に恐ろしく意識しつつあつた私は、彼の前に坐りながら、絶えず彼と私とを、心のうちで比較して一種の黙想ふけに耽ふつていた。

彼というのは馬琴ばきんの事で、昔伊勢本いせもとで南竜の中入前をつとめていた頃には、きんりよう 琴凌と呼ばれた若手だつたのである。

三十六

私の長兄はまだ大学とまらない前の開成校かいせいこうにいたのだが、肺を患わづらつて中途で退学してしまつた。私とはだいぶ年齒としが違ちがうので、兄弟としての親しみよりも、大人対小供としておとなの關係の方が、深く私の頭に浸しみ込こんでいる。ことに怒おこられた時はそうした感じが強く私を刺戟しげきしたように思う。

兄は色の白い鼻筋の通つた美しくい男であつた。しかし顔だちから云つても、表情から見ても、どこかに峻けわしい相そうを具そえていて、むやみに近寄れないと云つた風の逼せまつた心持を他ひとに与よつた。

兄の在学中には、まだ地方から出て来た貢進生こうしんせいなどのいる頃だったので、今の青年には想像のできないような氣風が校内のそこに残つていたらしい。兄は或上級生に艶書ふみをつけられたと云つて、私に話した事がある。その上級生というのは、兄などよりもずつと年齒上としうえの男であつたらしい。こんな習慣の行なわれない東京で育つた彼は、はたしてその文ふみをどう始末したものだらう。兄はそれ以後学校の風呂でその男と顔を見合せるたびに、きまりの悪い思をして困つたと云つていた。

学校を出た頃の彼は、非常に四角四面で、始終堅苦しく構しじゆうえていたから、父や母も多少彼に氣をおく様子が見えた。その上病氣のせいでもあらうが、常に陰氣臭いんきくさい顔をして、

宅にばかり引込んでいた。

それがいつとなく融けて来て、人柄が自ずと柔らかになつたと思うと、彼はよく古渡唐棧の着物に角帯などを締めて、夕方から宅を外にし始めた。時々は紫色で亀甲型を一面に摺つた亀清の団扇などが茶の間に放り出されるようになった。それだけならまだ好いが、彼は長火鉢の前へ坐つたまま、しきりに仮色を遣い出した。しかし宅のものは別段それに頓着する様子も見えなかつた。私は無論平気であつた。仮色と同時に藤八拳も始まつた。しかしこの方は相手が要るので、そう毎晩は繰り返さねなかつたが、何しろ変に無器用な手を上げたり下げたりして、熱心にやつていた。相手はおもに三番目の兄が勤めていたようである。私は真面目な顔をして、ただ傍観しているに過ぎなかつた。

この兄はとうとう肺病で死んでしまつた。死んだのはたしか明治二十年だと覚えている。すると葬式も済み、待夜も済んで、まず一片付といふところへ一人の女が尋ねて来た。三番目の兄が出て応接して見ると、その女は彼にこんな事を訊いた。

「兄さんは死ぬまで、奥さんを御持ちになりやしませんまいね」

兄は病気のため、生涯妻帯しなかつた。

「いいえしまいまで独身で暮らしていました」

「それを聞いてやつと安心しました。妾わたくしのようなものは、どうせ旦那だんながなくなっちゃ生きて行かないから、仕方ありませんけれども、……」

兄の遺骨の埋められた寺の名を教おすわって帰って行ったこの女は、わざわざ甲州から出て来たのであるが、元柳橋の芸者をしている頃、兄と関係があつたのだという話を、私はその時始めて聞いた。

私は時々この女に会って兄の事などを物語って見たい気がしないでもない。しかし会ったら定めし御婆おばあさんになって、昔とはまるで違った顔をしていはしまいかと考える。そうしてその心もその顔同様に皺しわが寄つて、からからに乾いていはしまいかとも考える。もしそうだとすると、彼かの女おんなが今になって兄の弟の私に会うのは、彼女にとってかえって辛つらい悲しい事かも知れない。

三十七

私は母の記念のためにここで何か書いておきたいと思うが、あいにく私の知っている母

は、私の頭に大した材料を遺して行つてくれなかつた。

母の名は千枝ちえといつた。私は今でもこの千枝という言葉なつを懐かしいものの一つに数えている。だから私にはそれがただ私の母だけの名前なで、けつしてほかの女の名前であつてはならないような気がする。幸いに私はまだ母以外の千枝という女に出会つた事がない。

母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼び起す彼女の幻像は、記憶の糸をいくら辿たどつて行つても、御婆さんに見える。晩年に生れた私には、母の水々しい姿を覚えていた特権たつがついに与えられずじまつたのである。

私の知つてゐる母は、常に大きな眼鏡めがねをかけて裁縫しごとをしていた。その眼鏡は鉄縁の古風なもので、球たまの大きさが直徑さしわたし二寸以上もあつたように思われる。母はそれをかけたまま、すこし顎あごを襟えりもと元へ引きつけながら、私をじつと見る事がしばしばあつたが、老眼の性質を知らないその頃の私には、それがただ彼女の癖とのみ考えられた。私はこの眼鏡と共に、いつでも母の背景になつていた一間の襖ふすまを想おもひ出す。古びた張交はりまぜの中に、生死しじだい大無常むじょうじんそく迅速すみ云々と書いた石摺いしずりなども鮮やかに眼に浮んで来る。

夏になると母は始終しじゅう紺無地の紹ろの帷子かたびらを着て、幅の狭い黒縹くろしゆす子の帯を締めていた。不思議な事に、私の記憶に残つてゐる母の姿は、いつでもこの真夏の服装なりで頭の中に現わ

れるだけなので、それから紺無地の紹の着物と幅の狭い黒縹子の帯を取り除くと、後に残るものはただ彼女の顔ばかりになる。母がかつて縁鼻へ出て、兄と碁を打っていた様子などは、彼ら二人を組み合わせた図柄として、私の胸に収めてある唯一の記念なのだが、そこでも彼女はやはり同じ帷子を着て、同じ帯を締めて坐っているのである。

私はついぞ母の里へ伴れて行かれた覚がないので、長い間母がどこから嫁に來たのか知らずに暮らしていた。自分から求めて訊きたがるような好奇心はさらになかった。それでその点もやはりぼんやり霞んで見えるよりほかに仕方がないのだが、母が四ツ谷大番町で生れたという話だけは確かに聞いていた。宅は質屋であつたらしい。蔵が幾戸前とかあつたのだと、かつて人から教えられたようにも思うが、何しろその大番町という所を、この年になるまで今だに通つた事のない私のことだから、そんな細かな点はまるで忘れてしまった。たといそれが事実であつたにせよ、私の今もっている母の記念のなかに蔵屋敷などはけつして現われて來ないのである。おおかたその頃にはもう潰れてしまつたのだらう。

母が父の所へ嫁にくるまで御殿奉公をしていたという話も臙氣に覚えていたが、どこかの大名の屋敷へ上つて、どのくらい長く勤めていたものか、御殿奉公の性質さえよく弁え

ない今の私には、ただ淡い薫を残して消えた香のようなもので、ほとんどりとめようのない事実である。

しかしそう云えば、私は錦絵に描いた御殿女中の羽織っているような華美な総模様の着物を宅の蔵の中で見た事がある。紅絹裏を付けたその着物の表には、桜だか梅だかが一面に染め出されて、ところどころに金糸や銀糸の刺繍も交っていた。これは恐らく当時の襦褌とかいうものなのだろう。しかし母がそれを打ち掛けた姿は、今想像してもまるで眼に浮かばない。私の知っている母は、常に大きな老眼鏡をかけた御婆さんであったから。それのみか私はこの美しい襦褌がその後小搔巻に仕立直されて、その頃宅にできた病人の上に載せられたのを見たくらいだから。

三十八

私が大学で教わったある西洋人が日本を去る時、私は何か餞別を贈ろうと思って、宅の蔵から高蒔絵の緋の房の付いた美しい文箱を取り出して来た事も、もう古い昔である。それを父の前へ持って行って貰い受けた時の私は、全く何の気もつかなかつたが、今こう

して筆を執つて見ると、その文箱も小搔卷に仕立直された紅絹裏の襦褌同様に、若い時分の母の面影を濃かに宿しているように思われてならない。母は生涯父から着物を拵えて貰った事がないという話だが、はたして拵えて貰わないでもすむくらいな支度をして来たものだろうか。私の心に映るあの紺無地の縞の帷子も、幅の狭い黒縺子の帯も、やはり嫁に来た時からすでに箆笥の中にあつたものなのだろうか。私は再び母に会つて、万事をことごとく口ずから訊いて見たい。

悪戯で強情な私は、けつして世間の末ツ子のように母から甘く取扱かわれなかつた。それでも宅中で一番私を可愛がつてくれたものは母だという強い親しみの心が、母に對する私の記憶の中には、いつでも籠つてゐる。愛憎を別にして考えて見ても、母はたしかに品位のある床しい婦人に違なかつた。そうして父よりも賢こそうに誰の目にも見えた。氣むずかしい兄も母だけには畏敬の念を抱いていた。

「御母さんは何にも云わないけれども、どこかに怖いところがある」

私は母を評した兄のこの言葉を、暗い遠くの方から明らかに引張出してくる事が今でもできる。しかしそれは水に融けて流れかかつた字体を、きつとなつてやつと元の形に返したような際どい私の記憶の断片に過ぎない。そのほかの事になると、私の母はすべて私

にとつて夢である。途切れ途切れに残っている彼女の面影をいくら丹念に拾い集めても、母の全体はとて髣髴する訳に行かない。その途切途切に残っている昔さえ、半ば以上はもう薄れ過ぎて、しつかりとは掴めない。

或時私は二階へ上つて、たつた一人で、昼寝をした事がある。その頃の私は昼寝をする、よく変なものに襲われがちであった。私の親指が見る間に大きくなって、いつまで経つても留らなかつたり、あるいは仰向に眺めている。天井がだんだん上から下りて来て、私の胸を抑えついたり、または眼を開いて普段と変らない周囲を現に見ているのに、身体だけが睡魔の擒となつて、いくらもがいても、手足を動かす事ができなかつたり、後で考えてさえ、夢だか正気だか訳の分らない場合が多かつた。そうしてその時も私はこの変なものに襲われたのである。

私はいつどこで犯した罪か知らないが、何しろ自分の所有でない金銭を多額に消費してしまつた。それを何の目的で何に遣つたのか、その辺も明瞭でないけれども、小供の私にはとても償う訳に行かないので、気の狭い私は寝ながら大変苦しみ出した。そうしてしまいに大きな声を揚げて下にいる母を呼んだのである。

二階の梯子段は、母の大眼鏡と離す事のできない、生死事大無常迅速云々と書

いた石摺の張交にしてある襖の、すぐ後についているので、母は私の声を聞きつける
と、すぐ二階へ上つて来てくれた。私はそこに立って私を眺めている母に、私の苦しみを
話して、どうかして下さいと頼んだ。母はその時微笑しながら、「心配しないでも好いよ。
御母さんがいくらでも御金を出して上げるから」と云つてくれた。私は大変嬉しかった。
それで安心してまたやすやすや寝てしまった。

私はこの出来事が、全部夢なのか、または半分だけ本当なのか、今でも疑っている。し
かしどうしても私は実際大きな声を出して母に救を求め、母はまた実際の姿を現わして私
に慰藉の言葉を与えてくれたとしか考えられない。そうしてその時の母の服装は、いつも
私の眼に映る通り、やはり紺無地の紹の帷子に幅の狭い黒縹子の帯だったのである。

三十九

今日は日曜なので、小供が学校へ行かないから、下女も気を許したものと見えて、いつ
もより遅く起きたようである。それでも私の床を離れたのは七時十五分過であった。顔を
洗つてから、例の通り焼麩麩と牛乳と半熟の鶏卵を食べて、厠に上ろうとすると、あい

く肥取こいとりが来ているので、私はしばらく出た事のない裏庭の方へ歩を移した。すると植木屋が物置の中で何か片づけものをしていた。不要の炭俵を重ねた下から威勢の好い火が燃えあがる周囲に、女の子が三人ばかり心持よさそうに燂を取っている様子が私の注意を惹いた。

「そんなに焚火たきびに当たると顔が真黒になるよ」と云つたら、末の子が、「いやあーだ」と答えた。私は石垣の上から遠くに見える屋根瓦の融けつくした霜しもに濡ぬれて、朝日にきらつく色を眺めたあと、また家の中へ引き返した。

親類の子が来て掃除そうじをしている書斎の整頓するのを待つて、私は机を縁側えんがわに持ち出した。そこで日当りの好い欄干らんかんに身を靠もたせたり、頬杖ほおづえを突いて考えたり、またしばらくはじつと動かずただ魂を自由に遊ばせておいてみたりした。

軽い風が時々鉢植はちうえの九花蘭きゅうからんの長い葉を動かしにきた。庭木の中で鶯うぐいすが折々下手な囀さえずりを聴かせた。毎日硝子戸ガラスビの中に坐すわっていた私は、まだ冬だ冬だと思っっているうちに、春はいつしか私の心を蕩揺とうようし始めたのである。

私の冥想めいそうはいつまで坐すわつていても結晶しなかった。筆をとつて書こうとすれば、書く種は無尽蔵にあるような心持もするし、あれにしようか、これにしようかと迷い出すと、

もう何を書いてもつまらないのだという呑気な考も起つてきた。しばらくそこで佇たずんで
いるうちに、今度は今まで書いた事が全く無意味のように思われ出した。なぜあんなもの
を書いたのだろうかという矛盾が私を嘲ちやうろう弄ろうし始めた。ありがたい事に私の神経は静まっ
ていた。この嘲弄の上に乗つてふわふわと高い冥想めいそうの領分のほに上つて行くのが自分には大
変な愉快になった。自分の馬鹿な性質を、雲の上から見下みおろして笑いたくなくなった私は、自分
で自分を軽蔑けいべつする気分けいべつに揺ようられながら、揺籃ようらんの中で眠ねむる小供こどもに過ぎなかつた。

私は今まで他ひとの事と私の事をこちやこちやに書いた。他の事を書くときには、なるべく
相手の迷惑めいわくにならないようにとの掛念けねんがあつた。私の身の上を語る時分には、かえつて比
較的自由な空気の中に呼吸する事ができた。それでも私はまだ私に対して全く色気を取り
除き得る程度に達していなかつた。嘘うそを吐ついて世間を欺あざむくほどの銜気げんきがないにしても、も
つと卑いやしい所、もつと悪い所、もつと面目を失するような自分の欠点を、つい発表しず
にしまつた。聖オーガスチンの懺悔ざんげ、ルソーの懺悔、オピアムイーターの懺悔、——それを
いくら辿たどつて行つても、本当の事実は人間の力で叙述できるはずがないと誰かが云つた事
がある。まして私の書いたものは懺悔ではない。私の罪は、——もしそれを罪と云い得る
ならば、——すこぶる明るいところからばかり写されていただろう。そこに或人は一種の

不快を感じずるかも知れない。しかし私自身は今その不快の上に跨またがって、一般の人類をひろく見渡しながらか微笑しているのである。今までつまらない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、あたかもそれが他人であつたかの感を抱いだきつつ、やはり微笑しているのである。

まだ鶯うぐいすが庭で時々鳴く。春風が折々思い出したように九花蘭きゅうからんの葉を揺うごかしに来る。猫がどこかで痛いたく噛かまれた米こめ噛かみを日に曝さらして、あたたかそうに眠っている。先刻さつきまで庭で護謨風船ゴムふうせんを揚あげて騒いでいた小供達は、みんな連れ立って活動写真へ行つてしまった。家も心もひっそりとしたうちに、私は硝子戸ガラスドを開け放つて、静かな春の光に包まれながら、恍惚うっとりとこの稿を書き終るのである。そうした後で、私はちよつと肱ひじを曲げて、この縁えんが側わに一眠り眠るつもりである。

(二月十四日)

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

初出：「朝日新聞」

1915（大正4）年1月13日～2月23日

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年8月22日公開

2012年9月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

硝子戸の中

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>